

朝鮮の三長は

顔が長い、

煙管が長い、

氣が長い、

といはれてるさうな、李朝の政治の下では顔の長いのは知らないが勢ひ氣が長からざるを得ず、働き損の草臥もうけをするよりも、長煙管でもくはへて無爲なるをよしとせざるを得なかつたかも知れない。

明治三十五年の交支那のかへり路に京城に入つたとき、或る人から

日本人は割増しをしないと時間外の働きをしない、

支那人は割減りをしてても時間外の働きをする、

朝鮮人は割増しをしてても時間外の働きをしない、

と聞かされたことがある、その詞は當時の實狀をよく寫してゐるか、それとも今日にお

いてなほその言の如くであるかそれは知らない、たゞ約十年前の臺灣をかへり見れば少くとも日支兩民の間の國民性においてうなづかれる點がないではない。

百二、内地人ベタ負け

臺北の街で人力車もいつの間にか土地の人の手にうつる、豆腐屋も鍋焼うどん屋も土地の人の手にうつる、土地の人は雨の日も風の日も朝早く夜遅く商賣大事にかせいでる、どうしてもなまける者より努むる者が勝ち、安い物より高い物がまける、この鹽梅では日本婦人の髮結の外は全部土地の人にしてやられるだらうといふ。

いかにしても支那人の暮し向きが至つて安直である、之に對し内地人はなんとか洋行など、看板だけ八釜しく、おまけに洋服を着込んで總督府の招宴などに町總代にでもなつてシルク・ハットで押しかけやうといふのだから、出錢が馬鹿に多くかゝる、薄利多賣でつゝましい土地の商人とは頭から相撲にならない。

況んや、況んやである、本島人の商人は四百萬人近い本島人と自由に臺灣語をはなす上、二十萬人近い内地人にも、片言にもせよ日本語を口にする、内地人は本島人の店には安い上に内地語をはなすから押しかける、内地人の商人は二十萬足らぬ内地人だけをお客にして、日本語一點張り高い品物をうりつけるから、内地人すら遠のく土地の人はよりつくはすがない。

どう考へても二十萬人相手の商賣より、四百萬人相手の方が手廣い、同じやうに朝鮮にも内地人五十萬人にすぎず、土地の人は二十萬人に近い、どう考へても五十萬人より二十萬人の方が多し。

四十倍のお客を相手にせず、土地の語はつかはない、高く止まつて品物まで高い、豈それ衰へざるを得んや、屁こたれざるを得んやである。

百三、朝鮮移入？ 内地移入？

朝鮮在住内地人約四十萬人、その約半數は官公吏、日韓併合前にすでに約八萬人の内地人があつたといふから、併合後の移住民は驚く勿れわづかに十二萬人！

朝鮮公論社の石森君曰く、併合以後政府の支拂經費十五億、朝鮮における租税の負擔八億五千萬、内地より移入の補助金公債等六億、内地人の投資四億、その他朝鮮關係の事業會社および銀行の社債等を合算すればその以上に達し、これに日清、日露の兩役に費せる約十三萬の精靈と十八億の軍事費を考ふれば、この間多大の犠牲に對し十二萬人の移民とはどうした貧弱なことであるか、いかに井蛙的島民とはいへものにはほどのあるものではないかと。

まあ犠牲はいかに多からうがそれはそれとして、内地人の朝鮮移入やうやく十二萬に對し、今や朝鮮人の内地移入が二十萬を突破せんとしつゝある、そして

嗚呼誰か懐しき故郷を離れ異民族の奴隸となるを喜ぶであらうか

など、悲憤的言辭を浴びせかけられては、これを繼子根性といはずにをられやうか、

等しく日本の國民である、往くも可なり來るも可なり、無理に引つ張つてこれるものでもなし、門を閉ぢて交通を遮斷できるものでもない、要は年々増加してゆく人口、年々教育をうけて文句をいひうるやうになつてくる知識階級の増加、その人々にいかに業を與へうるかといふことに歸着する。

教育が目的でない、學校は手段である、卒業してその學びしところを行ふべき職がなくんば何の教ふるところぞや、移民問題も教育問題も産米問題も、落つれば同じ谷川の水である。

百四、朝鮮人夫

富山縣の町村長會の講演に臨んだが相棒は守屋榮夫君である、談自ら朝鮮にふれる。土地の人のいはく、飛越線の工事に大分私共の土地も濕ふこと、思つてゐましたが、朝鮮人の土工が千人餘も乗込みまして、仕事は大分さらはれましたといふ。

聞けば一日の勞銀一圓七、八十錢、それで飯料と宿泊に七、八十錢、差引手取り一圓ほどだが、山中のことゝて相當酒も煙草も高い、そこへまた内地すれした先輩の朝鮮ゴロにいたぶられる、どうもあんまり樂でないらしいといふ。

昨夏アルプス上高地梓川電力の工事地帯を旅した時、朝鮮人夫が盛んに入り込んでゐる、飲食店でも酒も女もお客様は朝鮮人夫にかぎる、内地人より金放れがよいといふ話であつたがといふと、いや當地でも朝鮮人夫は矢張り酒と女に折角かせいだ財布の底をはたきますから、その方面では大分持てますといふ。

歐羅巴でも飲食店では日本人の評判がよい、なにも金を湯水のやうにまくといふのではない、先進國に來りなんとなくおとなしい、おまけに詞も不調法であるから文句もいひたくもいへない、已むを得ず素直である、うるさくない、始末がよいといふので評判がよい、一寸似通つてゐるなあと思ふ。(十一月一日富山ホテル)

百五、幸田たま子女史

九州の八幡製鐵所を中心にして約二千人の鮮人労働者がゐる、いづれも無學文盲の連中として、喧嘩口論や、没義道な又憐れな生活を送つてゐる。ところが同市高見小學校の教員をつとめてゐる幸田たま子女史は妹の伊藤小千代子と共に鮮人愛護を思ひ立ち、大正十一年九月十二日を以て丸山學院を創立し、禹政源外八名の製鐵所職工の收容教化をはじめてよりこゝに六年、修身、國語、算術を必須科目とし、歴史、地理、理科を隨意科目とし、本務の傍ら夜間を利用し、小學あり幼稚園あり託兒所あり、いづれも無報酬どころか鮮人の教化に獻身的の努力をつゞけてゐる。八幡市でも今日は舊託兒所の建物を無償で貸付ける、朝鮮の總督府からも獎勵金が下附される、前田長者町一丁目の收容所は年一年と事業が擴張され、既に三百近い朝鮮人を收容し八幡市二千有餘の朝鮮人からは朝鮮人の慈母として崇敬の的になつてゐる。

百六、白善行女史

幸田たま子女史が鮮人の慈母なら大阪吹田町の越中屋安太郎君は鮮人の慈父として鮮人から謝恩の記念碑を建てられるといふ。

眼明き千人眼くら千人の世の中といふ、誠や世の中は千種萬別である、忠南公州の金潤煥老の如きは稀に見る篤志家として萬人の儀表に立つべきであらう、殊に十六歳の青春の寡婦から八十餘歳の今日まで不撓の努力をつゞけ赤手空拳にしてよくその富の大をいたし、しかも育英のために資を寄與する事すでに五萬圓に上り、さらに七萬圓を出捐して公會堂建設の資に充てし平壤の白善行女史の如き、朝鮮思想通信の記事によればまさに懦夫をして立たしむるものがある。

われ／＼は暗い方面を看過してはならぬ、しかしそれにのみ氣をとられて明るい方面を閑却してはならぬ、内鮮共に美はしい資料は恐らくは他にも數多いことであらう、少しは御互ひに明るい方面にも眼を止めやうではないか。

百七、金秉直夫人

内鮮人の結婚がやうやく一年に五百組そこくになつて、今更内鮮融和の曙光なりなどは實以て笑はせる。

融和しやうがしなからうが、戀愛には人種も宗教も國境もない、これとても或は珍らしからぬ例かも知れぬが、さうありたいことである。

それは東京で中央大學を卒業した金秉直君夫妻である、夫人は千葉縣の出であるといふ、金氏に嫁して今大邱の西城町に住んでゐるとか、夫人は結婚するや白衣をまとひ朝鮮語を學び、夫を助けて郷黨のために親切に世話を焼いてゐるといふ。

吾々は日本の留學生が歐米で土地の婦人をめとつて歸朝する、中には日本服をまとひ日本語を話し、おしもおされもせぬ世話女房となりすまし、豆々しく働いてゐる夫人を見て感激の涙を催した事がある。

誰かこの金氏夫人を見て敬意を拂はずにをられやう。

こんなことを珍らしさうに書き立て、感心してゐる間は、まだく前途は遠いく。

百八、土屋商工學校長

鎮南浦の公會堂で朝鮮語について講演を試みた、學校のストライキ觀につき批判を加へた、この時に土屋商工學校長に遇うた事は忘れぬ思ひ出である。

土屋忠次君は高工機械科出身であるさうだが、一言にしていへば熱誠の結晶である、なんでも、とは基督信者であつたさうだが、後禪門に入り更に日蓮宗に歸依してゐるといふ南無妙法蓮華經のお題目を書きつけた、バケツや箒や雑巾で、教職員生徒の登校前に早々と、校長室から教員室の掃除を校長さん獨りでやつてのけるといふから變つてる。

冬になれば夫婦で寄宿舎を廻つてストーブを焚きつける、寄宿の青年が病にでもか

かれば、親身の父子にも見られぬほど熱心に世話をするといふから變つてゐる。

土屋校長の筆者に親しく話したには、私の學校は一家族です、私は卒業生の就職口を求めため朝鮮の各道をかけ廻ります、學校の經費に限りがあるので、汽車は三等宿屋は朝鮮人の本賃宿にとまります、皆の衆から校長さんはあまりひどすぎると氣をもんでくれますが、私はこれを一貫してます、いづれの土地でも年を重ねるに従ひ顔なじみにもなる信用もついてくる、どうやらかうやら卒業生のはけ口もそれ／＼片付いてくる、だから私の學校にはまだストライキなどといふものは薬にしたくもありません、私は生徒は貴様貴様と呼び捨てにします、土屋君それでは詞がきつすぎるひどいといふ、なあとに繼親繼子根性で君だのあなた方など、猫なで聲を出しても駄目です、親身の親と子の心持になつてゐればキサマで澤山です。

金はうんとかける、道具建は立派である、役者の顔觸れは揃うてる、しかしそれはたゞ學問を教へるところであつて、教へた子弟の落ちつく先のお世話には無頓着ではあるまいが到底土屋君だけの熱がない、誠が足りぬ、そこにストライキやゴタ／＼の絶えざる動搖がつゝいてる、さうした新聞記事の夥しきに想到し、捌け口は二段で學校増設の聲のみ高き刻下の世相に思ひ合はされて、土屋君の氣焔にあてられた時、これは夢ではないかとまで怪しみかつ驚喜した。

百九、昭和館

満鮮の地に入るべく今下關山陽ホテルの一室に居る。いづれ明日からは視察、會見宴會、講演と寸暇もなくなりさうである。渡鮮雜感二三を筆にして責を塞ぐことにする。

今朝當市大坪の昭和館に出かけた。昭和館とは山口縣社會事業協會の主唱にかゝり、縣費や内鮮有志の寄附にまち、約四萬圓を投じ鮮人宿泊所として建設した新館である。上陸した鮮人の爲に職業の紹介もする、一夜十錢で宿泊し得べく寢臺が百二十餘設け

られてある。

一八八

聞けば昨昭和二年中に來る者十二萬人歸る者八萬人、近頃は一日に五六百人下關に上陸し、三四百人釜山に向け乗船するといふ。もとく直ちに九州に中國、近畿より東に指し旅する者が多いが、中には言語も土地も不案内な鮮人を喰ひ物にする連中の好餌となるものも少くない。

關釜連絡船が着くと驛前には客引が何十人となく網を張つてゐる。宿屋なり飯場へ引つ張り込むと一人につき十錢の口錢になるさうである。一食十錢十五錢といふ甘言に引掛つて連れ込まれたが最後、五十錢、六十錢とぶつたくられる、中には汽車の切符を買つてやらうと、なけなしの懐中をはたき出される。そんな内地人こそ怪しからぬ、縛りあけてとつちめねばといふと、いやそれは皆朝鮮人だといふ、ところが其又惡むべき宿屋や飯場を順ぐりに荒し廻り、お神輿を据ゑたらても動かない朝鮮人のゴロツキ團があり、リユーとした洋服など着込んでるさうだが、宿屋、飯場泣かせ

で通つてゐるといふ。

せめてはこの獅子身中の蟲ともいふべき連中を退治せねば、わづかな金を懐になんとあてもなくふらく出かけてくる連中は、朝鮮ゴロのために先づ下關で眞裸にされる、渡來せんとする者はまあ何よりもちやんと行先なり、仕事のめどをよくきめてそれから乗り出すことである。

一八九

第九編 朝鮮雜觀

百十、筆硯更新

落穂集も號を重ねて、はや御約束の回数を超過して來た。

實は自分の旅日記歌草、さては内地向き樂屋落とも見るべきものが少くないので、いつまでもだら〜つゞけるのは如何かと氣にしてゐたが、なあにかまはないつゞけてくれて宜しいとのことである、肩のこらない小片であるため、紙上の邪魔にもならないのであらうが、それにしてもあまりつゞくと飽きがくる、もう引上げるによい潮時とおもふ、しかし讀者諸君の中からも共鳴的の手紙に接しないではない、尤も中には短見なり僻見なりとの非難もある、たゞし匿名だけに困つてゐる。

限りある旅程で全島を駆けめぐつたのであるから、まさしく短見でもあらう、しかし一つとところにある仕事にしばらくされてゐる者は、よしいかに長く在住すればとて、そ

の人の考へがよろしいとはいはれない、一つ問題に對しても内地人と朝鮮人はあたまから見方がちがふ、老幼男女士農工商、朝にある者野にある者、その土地によりその職により、皆それ〜に利害も異なれば考へもちがふ、こゝにおいて同じ政治を業とするものに民政黨もあり政友會もあり、善惡共に自ら辨じ他を排する、しかもその一黨内の一政策一決議すらそこかなりの議論を重ね紛擾をつゞける、一國の十七億の豫算案もあらゆる法律案も、僅か一二票の差で可決となり否決となる、人それ〜見るところによりてその考へ方に相違あるは、まさしく人心の異なるその面の如しである、不思議でもなんでもない。

こゝに更に筆を續けるに當り、善惡いかなる批評も甘受したい、それはかうした自分の考へはこの、ちとも筆に舌に公にせられる機會が少くないからである、事實の誤りに至りてはなほ更注意を與へてほしい、なほ所見を力づけるよい資料であればそれも送つてほしい、この機會にいま、で好意をよせて書信をおくられた諸氏に厚く謝意

を表して、まただら／＼と書つけて見る。

百十一、御大禮と新領土

御大禮とあつてもろ／＼の大官は内地へむけ相次いで東上する。

朝鮮といはず臺灣といはず、總督がその土地の衆庶を代表しこの盛典に列するは、たゞ光榮といふばかりではない、その間に意義のあることである。

同時に新領土は内地とかけはなれてる、その新附の民もまたそれ／＼に大禮奉祝の盛意をいたしてゐる、この時に當り勅任官の八分通り九分通りまで内地に發足して留守になり、あとはがら／＼のやうになるといふことは考へものである。

御大禮の式場に參列することは必ずしも大なる意義を持たない、しかしさるときにその任地にあることはかなり重大なる意義を持つてゐる。

任を臺灣の地にうくる者その責や重く且大である、なにも大正天皇御大禮の當時、

自分が參列を拜辭して任地に赴いた事があるといふので事々しくいふのではない。

百十二、トロ敷設

臺灣には手押しの輕便軌道俗にトロといふものが、山地といはず平地といはず至るところに蜘蛛の巣のやうに網を張つてゐる。

トロは折々脱線する、無論汽車の脱線よりは多いだらう、しかし勾配が強からうがカーブが急であらうが、委細かまはず縦横無碍に安い經費で敷設せられる。汽車でなければなぞとさう／＼贅澤をいふべからず。

教育の劃一主義の不可なるは、汽車あり輕鐵あり、電車あり、自動車あり、人力車あり、自轉車あり、駕籠あり、トロあるを以て知るべし。

朝鮮の片田舎ことに國境方面は、鴨綠江豆滿江に沿うても亦これらの支流に沿うても縦にも横にも先づトロが敷設せらるべし。

消極には警備のために積極には土地開發のために。

百十三、トロの衝突

トロを敷く位なれば無論單線が多い、途中で出くわすと何れか一方がレールから臺車を外す、相手の臺車の通りすぎるをまちてまた線路にはめ込む。トロの妙味はこの外したりはめたりするところにある。

ところで臺灣でも昔は降りでも登りでも、乗客貨物の多少をとはず、先づ内地人をのせた臺車と本島人をのせた臺車と出くわすと、本島人が乗車せる臺車を外したものだそうなの。

或る時臺北の長官々邸の一室で製糖會社の某重役が僕に面して曰はく、近頃はどうも本島人が生意氣になつた、臺車で出遇ふても下車しやうとはしない、實に怪しからぬ、要するに總督府は腰が弱い、本島人をつけ上らす、増長さす。兒

玉や後藤の時代はこんなことはなかつた。

僕はこれに答へて曰はく、

その時分の製糖會社なり重役は今日と又果して變りはないであらうか、その昔は補助金の前には督府の技師どころか技手の前にも叩頭した、會社も微力なら重役の腰も低かつた、時の總督や長官の前には中々頭は上らなかつた、ところで製糖業は年と共に盛大となる、重役も何萬何十萬といふボーナスを懐にする、片手間には代議士にもなる、陣笠は幹部となり更に大臣にもならうといふ、さきに頭の上らなかつた總督長官を眼下に見下さうといふ勢になつた。

此間教育の向上普及は著るしく、内地人の前にはたゞ盲従してゐた本島人も、教育に眼ざめて文句の一つもいふやうになる、荷物があつた四人五人と乗つた本島人の臺車が、身輕な一二人の内地人を乗せた臺車に道をゆづらないとて何の不思議があらうか。

總督長官の權威？ は年と共に薄らいでゆくであらう、また今までは厚すぎたとも解せられる、同時に内地人のみえらくなつて本島人のみ舊の如くあれ……それではちと蟲がよすぎはしまいか。

こんな詞の受渡しをしたこともあつた、似たやうなことが朝鮮にもあるかどうか知らない、トロ敷設論からふと思ひ浮かべたまゝに……

百十四、搔きむしる

最近の臺灣のある新聞に、苗栗よりの投書として次の如き記事を紹介してある。

私の知人の本島人にこんなことがありました、その人は女兒出生で姓は郭だが郭千鶴子と命名して派出所に届けたところが、警察では郭氏千鶴子でないといけなまいふ、郭君の意志はこの氏といふ字を省くことも大部分であつたが、法規をたてにいはれて見れば仕方がない、遂に私が中に立つて郭氏鶴子と届出さしてすんだこと

があります、何とかしてこの○氏○子の氏を取り除く法は出来ぬものでせうかね、本島人で内地風に命名する位の人は皆この氏を入れることを好まぬ風です。

この記事に對する記者の意見として、右の投書を見ると警察署のやり方は全くなつてをらん、そんな馬鹿げた規則があらうとは思へない、本島人の習慣を規則とでも錯覺してゐるのだらうが、一事が萬事である、決して小さい問題でないと附記されてある、全く以てなつてをらん、全く以て小さい問題でない。

この記事を見てふと北鮮を巡遊中さる朝鮮人のある茶話が思ひ浮んで來た、それはひとり火田の民といはず山地僻村にあるものは、年額百圓にも充たない収入の中から、教育の普及とありて兒童を學校へ狩り立てられる、一里二里の山道を通ふのもよろしいが、何分にも毎月一圓二圓のお金を絞り出さねばならぬ、有難すぎて涙がこぼれるといふ。

いやそれどころではない、病人ができた、死んだ、それ面のお役所まで届出とある、

それには醫師の證明書が入用とある、お醫師さんや御役所へ三里四里の山道を登り降り一日丸潰しにするのもよろしい、證明書に一圓！ 都會人には數にも足らぬはした金かも知れないが、地方人には大枚なお金である、都會も田舎もおしなべた四角四面に行届いたお政事向には、これもありがた過ぎて涙がこぼれるといふ。

規則といふものはなければならぬが程度がある、京城の大理石の大きな建物の中で、北鮮の山の奥から多島海の孤島のはてまで、一律に規則づくめで、痒いところまで手を届かせやうといふ、あまりかき過ぎると、搔きむしりになる、血がでる、破傷風になると萬瘡膏では追つ付かない。

百十五、朝鮮と四國

大連である寄合の席上でさる友が、内地の人は分らなさすぎる、打通線がなにやら吉敦線がなにやら皆目知らないところほしたら、筆者はこれに答へてそりや臺閣の諸公

だつてよくは知らないだらう、滿洲はおろか折紙付の日本領土である臺灣についてもいろ／＼の思ひ出がある、基隆港からこの日濃霧のため止むなく船を岸壁に横付けとなしなど、打電した名記者もあれば、臺灣の衛生状態の非常に進歩せることは、我々専門の報告等により既に承知せる次第で御座りましてなど、歡迎席上で挨拶してゐる名ドクトルにして、基隆港に入るに先だちマラリヤ豫防とありてうんとキニーネを頓服するもあり、又福建や廣東民族である平地の島民も、山嶽地帯にこもつてゐる生蕃もゴツチャにして、臺北への汽車の中から生蕃はまだ見えませぬかと伺ひを立てる特志家もある、されば此度朝鮮でもさる内地の商工會議所の連中が咸北咸南などは一道にして九州や四國とその廣さ相布けりといふ、あの大きな朝鮮に乗込んで、朝鮮は四國位でしやうかなあと眞顔で質問され、苦笑させられたと、うそのやうな話も耳にしたと口傳へしたことである。

とにかく日本人は本を見たがらぬ、見ても研究が足りない、いづれは朝鮮への旅で

ある、汽車の中で鐵道案内のある頁をくりひろげて、甲地何時發だ、乙地何時着だといふことだけは調べもする、しかし十二三時間走る二十二三時間かゝる、は、あ東京大阪間位かな、東京下關間位かな位の想像があつて然るべしである、鐵道局案内の一頁位はひろげられねばならぬはずである。

しかし至つてのほゝんな旅の人は、車窓から四方の景色を見ることか、居眠りはする、無駄話はする、むしやくと喰ふ飲む、たまたまひろげて本はといふと小説本か講談雜誌。

知識慾のなさすぎる國民、間島といふ島は日本海にか黄海にか、などと問はぬがせめてものめつけものなり。

百十六、失職と結婚

鮮滿を知らぬ人も多すぎれば、旅に出かけていつても視察が行き届かなさすぎる、

今度はその土地にゐても尻が暖まらない、また暖まつても、ある鑄型の中にも勢には通じない。

お役所や會社銀行などで、やめられさへしなければ、いつくまでも尻を据ゑてよろしいが、新陳代謝の原則に支配せられていつかはやめられる、やめられてもその土地を墳墓の地となすべしなど、内地の特志家などは他人へは遠慮のない勝手な注文をつける、しかし事實は必ずしもさうはまるらない。

ある時帝國議會である名士は、卓をたゝいて對植民地政策はまづ結婚による血による同化によるべしと叫んだ、私は卽座に答へた、臺灣では名士や紳商の子弟は内地人のしかるべき家庭と結婚することを望んでいます、たゞ日本といふ法治國とかでは合法の結婚は戸籍令といふ御規則に引つかゝつて、やれ無籍になるのどのの行きなやんです、しかしこれも片付いたとしても、果して内地の然るべき家庭の方々は快よくその子女と臺灣人との結婚をおみとめになるか、さういふ先づあなたから見本を見せ

ていたゞきたい!!

朝鮮、臺灣などでは一と廉内地並より多分不相應に持てゝゐた、肩で風を切つてゐただけに、浪人になつて見ると在職の時とそのけじめが大きすぎる、しかもその存在があまりに目立つてゐる、どうしても東京の眞ん中で前の大蔵閣下や陸海軍の大將閣下が、群衆の中に交つて電車の帶革にぶら下がりのと大分趣がちがふ。大分趣がちがふからというて、一々内地へ引下がられるのも感心しない、なにも威張つてゐるばかりが生存の意義でもあるまいから。

百十七、職を生かしめよ

無智なれば知らぬが佛なり、教育といふことは不平を覺えることなり、不平を鳴らすことなり。

喰ふに困らず忙しければ腹滿ちて鳴らず、職なく貧乏すれば腹空しくして鳴

る。

中樞院はその議官達の年配から經歷から推しても、いはゞ功成り名遂げし人々の最後の榮譽ある休息所と見るべし、しかもその休息所なる所以があまりに露骨に見えては、折角の中樞院も老人不平の醸成所となるべし、伊藤統監は中樞院の老人達をしてその面目を保たしむべくいかに心を使つたことか。

これに比べては地方の道廳は日々生きた仕事に追ひまくられてゐる活舞臺である、その道長官や部長、議長連の眼を廻して、忙しさにきりきり舞つてる中に、道參與官といふ勅任官あり道長官の諮詢に與るらしい。

かつて或る參與官はしみぐに筆者に語るらく、朝に門を出るとき家族は見送りて御苦勞さまな事とあいさつする、夕に門に入るとき家族は迎へて御草臥れのこととあいさつする、誠に冷汗脊をうるほすものがあるといふ、一向に御苦勞なこともない草臥れやうもない、終日徒手傍觀たゞ無爲に苦しめるてれくさゝをいふのであ

る。

人間は喰はねば生きてをられぬ、といふて喰つたゞけで満足はしてをられぬ。職を與ふればその職を生かしめよ、顔の立つやうに氣をつかへ。

百十八、二二が四

必賞必罰は政治の要諦であらう、しかも大國民がますくその大をなさんとすときは必罰の方はやめてもよい、耶穌は愛といひ、釋迦は慈悲といひ、孔子は仁といふ汝の敵をも抱擁するの雅懐も時によりては心得べきことである、それだけに必賞の方は忘れてはならぬ、軽く見てはならぬ。

政黨政派の連中は随分露骨に、苟くも我黨とあれば黒いものも白いとかばひ立てをする、それまでにもおよばないが、兎にも角にも身方といふ色がつき看板が掲げられてをれば、それはどこまでも眼をかけねばならぬ。

かつて内田良平君から朝鮮併合當時の論功行賞や事後の處置ふりにつき、親しくその遺憾とする點を聞かされたことがある、同君は或る雑誌にも公にしてゐる位だからこゝに精しく書き立てるまで、もあるまい、しかしこれは何も併合のあと始末ばかりでもない。

筆者在臺七年の間かなり頭を悩ましてゐたことは、新領土の民、しかも我に双向ふもの、處置振りよりも我に身方せるもの、處置振りであつた、これだけいへばハ、アと合點がゆくであらう。

時移り人變る、次第に御政治振りが只ソロバンでのみはじき出されるやうになる、しかし二二が四とのみでは味もそつけない。

百十九、故郷忘じがたし

はじめて引き合はされると互ひに知りたいは、第一に現在のその人の身狀である、

第二にはその出身學校とその出生地である。

東京、大阪といふやうなところでは同郷人といふて見てもはじまらないが、地方にゆくとこの同郷といふ氣分がかなり強い、鹿兒島などに至りては強すぎる。

その地方色も内地ではまだそれほどでもないが、すでに北海道までゆく、臺灣までゆく、故郷をはなれて遠くなるほど物さびしくもまた心なつかしくもなるのであらう、ますます地方色が濃くなつてくる。

桑港のポスト・ストリートにゆくと、何々縣人會事務所といふ看板が軒並にか、けられてある、何々縣ではまだ物足りない、筑前、筑後、備前、備中といふやうに、國名を冠した郷友會事務所の看板もある、まだそれでも物足りないと見えて小倉、中津、久留米、柳河といふやうに、藩名まで冠した看板まで散見せられる。

あまり出生地の故郷などにこだはることは國際的にまで進出して來た二十世紀の世界人として考へものである。

がものには程がある、郷黨閥の臭味の紛々たるに至りては鼻持がならないが、既に親子夫婦一家一族があつて見れば同郷同學のよしみといふものがあるに不思議がない、有るのもよろしい、無いのは嘘である。

百二十、郷を同じくする人

朝鮮に旅して至るところ縣人會の歡迎に接した、楚人冠も紀州僕も紀州といふので、釜山に上陸すると迫間房太郎翁が終日東道の勞をとつてくれた、朝鮮に入りて君は千萬長者となるまでにははや五十年に近き星霜を経て、今更紀州人でもあるまい、又吾々と時代も大分ちがつてる、おまけに今まで親しく付き合つてゐたわけでもない、しかし同郷の人といふ、そこに利害もなんにもない、たゞなんとなく懐しいのである、それでよい。

大邱では横巻聯隊長が音頭を取つてその官邸の庭に紀州人が二十名近く顔合せをし

た、京城では榎本隆、佐藤虎次郎、岡庸一、吉村謙一郎の諸氏をはじめ三十名ばかりの同郷人會に迎へられた、このほか清津に岡本常次郎、平壤に赤井定義、奥田英一郎、新義州に神戸章、安東縣に栖原常二郎の諸氏あり、それらに縣人歡迎會開催の申込をうけたが、所在いづれも切りつめた日程でその厚意をうける事が出来無かつたのは遺憾な事であつた。

ことに新義州の官民歡迎會場から夜深かく、鴨綠江を渡り奉天に向ふべく、安東驛にかけつけた時、紀州人會といふ大きな旗を先頭に、多數の人々から見送りをうけた時は、一人の舊知の人があつたわけでないだけに、送る者送らるゝ者そこに故郷忘じがたしといふ古い詞がしみぐと味はれた。

百二十一、同窓の友

樂屋落のやうな話ばかりつゞいて恐縮であるが、同郷から同學の方へも一足外れ

て見る。

釜山の橋本法院長には約三十五年振で遇つた、馬場慶州郡守にはかれこれ四十年振であつた、京城では城大の松浦、小田兩君をはじめ、篠田李王職、三上工博、平山高普、横田法務、飯泉不二の諸兄としんみり歡談夜十二時におよんだ、平山、小田兩君とは又まさしく約三十年振りにもならうか、三十年が四十年、五十年を経ても同窓の友といふものはなんとなく懐しい、必ずしも利害のきづなによりて結ばれたのぢやないなどと理くつ張るにはおよばない、昔から竹馬の友といふ詞もある、學校友達それも古いほど味がある、篠田小田翁？ などを見ると、柔道の道場でへつぴり腰で脊負投げたり投げられた昔が思ひ出される、飯泉翁？ のお面お小手と叫んだ黄色い聲もしのばれる、それが春秋こゝに三十餘年、ところは朝鮮の京城郊外清涼里で、南山や北漢山の南畫に見るやうな奇峰峻嶺を前にし、ゴルフのクラブを振つてトツバルカンダと叫ぶキャデキーの聲を耳にしながら、アウバンの球を松林の中にさがし廻るなど

とは、古い詞だが人の行末と水の流れである、いやはやい、加減に長々しくも生きてゐるものである。

百二十二、遞信畑臺灣畑

脱線するからには脱線しついで、ある、筆者は永らく遞信省に在職してゐたから古い古いなじみが多い、清津の保坂君、京城の八田君などは、北清事變の時に一つ釜の飯を食うた仲間である、元山の上田君、平壤の梶本君、京城の蒲原君、松島君、橘川君さては江原の石田警務、咸北の安達知事、曰く誰曰く誰、算し来れば数が知れない。鴨綠江に來れば關東廳の櫻井遞信局長がわざわざ迎ひに來てくれてゐる、安東の河野君奉天の内田領事、大連に至りては杉野市長、木村滿鐵人事課長をはじめ、遞信關係の舊知が多いの多くないの、その舊知の人々から昔なつかしく至るところ歓迎を受けた心持はまた何んともいへない。

筆者は臺灣にも足かけ七年在職した、今朝鮮にも全南に松下警務あり、江原に小西内務あり、京城に賀田、樫田の諸氏あり、大日本や鹽水港系の甜菜糖の工場もあれば、滿洲一帶には臺灣の醫專を出た本島人諸君が少くない、山河草木皆知己とかいふ詞もあるが、山河至るところ舊知ありまた樂しからずやである。

百二十三、師弟の思ひ出

ことに筆者は早稻田、中央、法政、一橋商科等の各大學に講師となつたことがある、それも明治三十一年ごろ學校を卒業したかけ出しからであるから、もう三十年にもなる、先生も學生も今日になればどちらが年が老けて見えるか分らない、事實またあまりちがつてをらぬ。

大邱覆審法院の五味逸平君、圖們鐵道の石本正平君は、今の中央大學の前身法學院のときの、ともかくにも御弟子である、當方には記憶もなかつたが、先方から白髪

頭あたまや禿はけた頭をふり立て、名乗なつてくれたのだから間違まちがひがない。

全南木浦ぜんなんもくから京城けいじやうに向ふ汽車中へ石鎮せきちん衡知事かうが迎へてくれた。石知事せきちうじは私はあなたから教をうけましたといふ、聞けば法政大學はふせいだいがくの前身和佛法律學校時代だといふから、古いにも古すぎる。

これらの諸君しよくんからそれ〴〵に名乗なられて昔語りをした時は、なんとも知れぬ嬉しさに込み上げて来た、三十年をへだて、互たがひに健在けんざいである、それで互たがひに名乗なりうる名乗られうる立場たちばにあるといふことは何んといふ仕合せしあはなことであらう。

かつて郷里きやうり熊野くまののはて、學友中村巍君せんきよすむせんこんぜつの選舉推薦演説せんぎよせんぜんに廻つた時、四十餘年前に教をうけた小學校時代の先生せんせいをさがしあてた時の喜びに左も似たり、一昨日さくじつ、十月の三十日東京で、明治三十一年帝大法科を卒業した同窓どうそうが三十年記念會を催して、一木、土方、藤澤、金井の諸先生しよせんせいを迎へた、その生新なままたらしき喜びのつどひを思ひうかべて、ついでかうした事まで筆にする事になつた。

百二十四、佐藤眞珠王

佐藤虎次郎翁さとうとらじらうをうが亡くなつた。

令息の結婚といふ御目出度おめでたごとで上京した途次、筆者を朝日新聞社あさひしんぶんしゃの樓上にたづねてくれたのはこの春の事とおもふ。

京城で朝鮮人の兇徒きやうとの手にかゝり重傷じゆうしやうを負うたにかゝらず不思議ふしぎにも全快した翁は、筆者の目の前でもろ肌はだをぬいで見せてくれたが、まさしく胸部に大きな深い生々なまくしい創口が残つてる、それにしてもよく助かつたものである、一つは翁の健康けんかうの然らしむるところでもあらうと思つてゐるが、その健康な佐藤翁さとうをうは亡くなつた。

この度京城けいじやうに入るや翁は南紀の郷友きやうゆうをあつめて歓迎會を催してくれた、忙しい中にも翁と相語りしこと幾度いくたびなるを知らず、その見るから丈夫さうな佐藤翁さとうをうは俄に亡くなつた。

紀州熊野の佐藤家と和歌山の下村家とは、その間にかなり古い深い交はりがあつたが、そんなことはこゝに筆すべきでない、筆者の故人を初めて知つたのは大學在學中であつたとおもふ、多分明治二十七八年の交でもあつたらうか、猛烈な排日運動のため、濠洲木曜島を引上げて歸朝した時であつて、翁は當時木曜島における邦人眞珠採取業の牛耳を取り眞珠王とうたはれてゐたのである。

それから佐藤翁は横濱貿易新聞社に群馬縣の代議士に、幾變轉の後が朝鮮入となつた、その後のことはこゝに筆にするまでもない、我等は内鮮同民會のために努力を傾注してゐた翁の志を壯なりとし、その誠意を多とするものであつた。

しかも翁の病は同民會の事務のために病苦をおしたことがその死を早めた、その病の原因は又さきにうけたる創傷にありといふに至りては、その死や尊むべくその死や意義深しといふべきである。

人間の壽命はさづかりものである、いつかは果つべきである、波瀾曲折に富みし翁

は有意義にその命の終りをつけた、今日は齋藤前總督をはじめ生前の知友が主催により、故人の追悼會が鶴見の總持寺で催された、筆者はこれに參拜することができなかつた、こゝに思ひ出の一節を録して謹んで故人の靈を弔ふ。(十一月二十七日)

百二十五、韓邸の一夜

楚 人 冠

京城に着いたその夜、朝鮮財界に知れた韓相龍君から下村君と共に朝鮮料理の夕食に招かれた、その時數々の珍らしい御馳走の間に出た數々の談の中に次のやうなことがあつた、韓君の談である。

下村君が臺灣の民政長官を勤めてゐた時のこと、ある年臺北で領臺二十年の記念博覽會が催されて下村君の夫人の父君佐々木愼思郎翁も見物かたぐ見えてゐた、臺北から一晩泊りで往復の出来る角板山といふのが一番手近で見らるゝ蕃界だといふので、ある日その角板山へ下村夫人とその嚴父とが遊びに行くことになつた、丁度その折

韓相龍君も朝鮮から來合せたので一所に蕃界見物に行かぬかと誘つて見たところ、韓君も是非行きたいといふことになつた、途中護衛の兵もつけることになつてゐるが、何分老人と婦人のことだから、下村君から「道中よろしく頼む」位のことを、その時韓君にいつたものらしい。

韓君に取つて臺灣は初めての土地であり、下村君とは無論初対面である、その初対面の朝鮮人に自分の細君と老人とを托して、蕃界へ同行させたといふことが甚だしく韓君を感激させた、こんなに内鮮人を無差別に扱つてくれる民政長官の態度をしみじみと感じた。

いよく角板山に着いて宿舎に入つた時、ふろの支度が出来たと知らせて來た、長官の嚴父ではあり一行中の年長者ではあり、無論佐々木翁が一番に入るべきところであるが、謙讓な佐々木翁はどうしても先に入ること承知しない夫人も元よりその父に先だつて入らうとはしない、二人して頻りに韓君に先づ入れと勧めたのださうな、

朝鮮から來たまゝの他人を氣味が悪いとも思はず、先に湯に入らせた夫人と夫人の嚴父とのやさしい心持に、韓君またもや感激させられた、繼子扱ひをされがちの韓君は心からなる感激を禁じ得なかつたのである。

韓君はこの二つの偶然の出來事から、この好長官とその一家とに傾倒するやうになつたと、韓君はさも感に堪へぬものゝやうにし、みりと語り終つた、聞いてゐた吾等も何らの美談ぞと思つたが、當の下村君は全く記憶にも無かつた事として、この話をこの夜初耳にして、「僕が何の氣なしにしたことをそんなに感謝してくれやうとは、今の今まで知らなかつた」と、下村君は後で私に話した。

差別を嫌ふ者は僅かな無差別でかくまで喜ばせ得るのである、朝鮮人に接する人々の心がくべきことだと私は思つた。(二十四日元山にて)

百二十六、終りに臨み

落穂集もはや百回を突破したとおもふ、いよくこれで筆をおく事にする。

實は何よりも京城を中心にした感想はかなり多い、恐らくはその筆に上るべきを期待されてる讀者もあつたこと、おもふ、總督、司令官といはず、總監、局長諸氏といはず内人鮮人の別をわかつた、筆者は親しく會話して聞くべきは聞き、いふべきはいふてある、こゝに表立つて筆にする事は、却つて中途半端になつて仕舞ふからやめにする、何よりももうだら／＼と書きすぎた、腹八分目といふことがあるに、筆はずでに十二分を脱してゐる。

今更ながら一ヶ月の巡遊中一方ならず官民各位よりうけし御歡待に對し、衷心より御禮を申し上げ、最後に滿支までその行を共にしてくれた同郷の吉村謙一郎殿に謝意を表する。(三、十二、十)



冠人楚と良學張と南海りよ右てつ向

第十編 滿洲北平より濟南へ

百二十七、奉 天

楚 人 冠

趙欣伯氏は故張作霖氏幕下の士、刑法の研究で日本の法學博士を勝ち得た人、過日の列車爆破騒ぎに一時張氏とともに命を落したと傳へられた人であることは人の知るところ。海南氏とは舊知の間柄であるによつて、奉天に着くなり第一番にこれを訪ふことゝなつた。

時節柄わざと隠れてゐるわけでもあるまいが、居所がなか／＼分らなかつたのを、やつとつきとめて尋ねて見ると、玉の如き溫顔ににこ／＼と笑をたゝへながら愛想よく語る。流暢な日本語である。

談、時局に涉らんとすれば、巧に身をかはして多くをいはなかつたが、それでも何かの話の次手に『どうも日本政府の方針が分らないので困ります』と本音を吐いた。

如何さま困りはせぬかと察しられる節もある。

張學良氏を訪はんとして大元帥府に至れば、ものくしい軍兵の警戒のうちに、さうざうしい支那樂が聞える。張大元帥の靈を祭つて連日法要中とある。祭壇のあたりには色々の書や人形や燈明やがにぎやかに列べられて、鐘の音、笛の聲が引つ切りなしに鳴らされる。われら一同うやくしく靈前に立つて、支那式に三拜して引き下る。こゝで會見の約束をして午後再び張學良氏を訪ふた始末はその日電報した通りであるから、改めて説かない。會談終つてこれから寫眞を撮らうと立上つた時、ちやうど私と肩を列べた張學良氏はふと私の胸につけたロータリーの會員章を見つけて、人差し指でこれを押へながら、にこくと『ロータリー・クラブ』といった。如何にもなつかしいものを思ひがけず見つけたやうな様子に見えた。好漢張學良ロータリーを知れり。日本の大臣方の中にも知らぬ人のあるのに。

極めて充實した一日を奉天で送つて、その夜われらは大連に向つた。二十年前に來

て見た時に比べて、奉天は見かはすほどかはつてゐる。あの時は汚い町であつた。

(七月六日)

百二十八、大連と旅順

楚 人 冠

大連に着くと、そのまゝ星ヶ浦のヤマト・ホテルに入る。船の都合でこゝに三日滞在したが、そのうち一日を割いて旅順に出かけた。

わが社のロセツタ丸滿鮮巡遊について來た二十年前には、大連にある家としては大抵地震直後の東京のやうに掘立小屋みtainなものばかりで、道路といふは砂ほこりの立つごみだらけのものであつた。それが今大家高樓軒を列べ、道路は大部分アスファルト敷の大道となり、そのころ、とある山の中腹にちよんほりと立つてゐた露國の劇場が、全く家々の間に立ち圍まれて、辛く餘命をつないでゐるといふかはり方である。その當時ロセツタ丸で同行した今のわが社の上野専務も、まだ帝國大學の學生であつ

た——。

大連はそれほどかはつてゐるが旅順はあんまりかはつてゐない。東鶏冠山に自動車路はついてゐるが、コンドラチエンコ將軍戦死の跡のあたり依然たり、二百三高地その名を爾靈山と改めたきりで舊態依然たり、町の中を歩いて見ると、昔ロシア人が残して行つた馬車がそのころはこれがこはれたら、そのまゝなくなるでせうといはれてゐるに拘はらず、後から／＼新しいのが出来て、今も昔のまゝに走つてゐる。家の様子町の具合ほとんど二十年前のまゝながら、ただ著るしく目についたのは、そのころのはげ山に大分小松が生え茂つたこと、戦跡のいたるところに非藝術的千萬な塔や碑がうるさいほど立つてゐることであつた。

木下長官の官邸で美味求眞的な午食の饗應にあづかつて、海風涼しく吹き入るベランダに心のどかに物語ること二時間ばかり。腹に一物あるわれらは、二時ごろ辭して星ヶ浦のゴルフリンクスを目掛けて旅順街道に車を飛ばす。この街道は三十七、八マ

イルの間全部アスファルトの好ドライブである。

翌日海南氏等と別れて、自分だけ日本にかへる。關東廳の遞信局長櫻井學氏わざわざ新義州に一行を出迎へられ、道中より大連滞在中何くれと世話を焼かる、こゝに附記して厚くその好意を謝す。(七月十日あめりか丸にて)

百二十九、大連旅順の歌

大連星ヶ浦リンク

海邊より吹きあぐる風に黍の若葉

山のなぞへを白みつゞくも

霧のながれ大連富士をかくしをはり

見る／＼またもあらはしにけり

とがり岩の山おもしろくならびたり

名をとへどみな人知らなくに

旅 順

くづれたるベトンに這へる山葡萄

コンドラチエンコが斃れしところ (東鷄冠山)

いたゞきの山の低處にたどりつけば

にはかに風の吹きあけきたる (爾靈山)

百三十、義和團事變

天津英租界のアストルハウスはまさしく昔そのままの舊式なホテルである。同じイギリスでも保守黨代表といふところであらう。一々電話々々といはれては一階までおろされるので閉口する。

貯金局以來のおなじみの總領事加藤外松君が見える。臺灣以來おなじみの軍司令官

新井中將が見える。鼎坐して語つてゐると、ふと約三十年前義和團事變當時の會遊がしのばれてくる。あの時の總司令は伊集院彦吉君であり、軍司令官は福島安正君であつた。このほど現役から退いた菅野大將は少佐であつたのだから、古いことは古い。

武齋號の主人竹田才吉さんはと問へば健在だが内地に歸つてゐるといふ。さうなると當時正金の支店長であつた現興銀の鈴木島吉君が終始一貫、今なほ銀行界で活躍してゐるのは珍とすべきである。いかにも持ちがよい。

あくる十四日は午後四時に北京へ向け立たねばならぬ。おひるは新井中將の招宴がある。場所もカンツリー・クラブ、僕が紀州人とあつて同郷の林、二階堂、貴志の諸將校も同席と、心づくしのもてなしである。その間を縫うて宣統廢帝と段祺瑞氏に會見せねばならぬ。おまけにゴルフのリンクものぞかねばならぬ。朝の六時半といふに東棉の淺山、廣瀬二君を煩はして連日の土砂ぶりでぬかるんでゐる對岸舊ロシア租借地へアウトをはしらす。

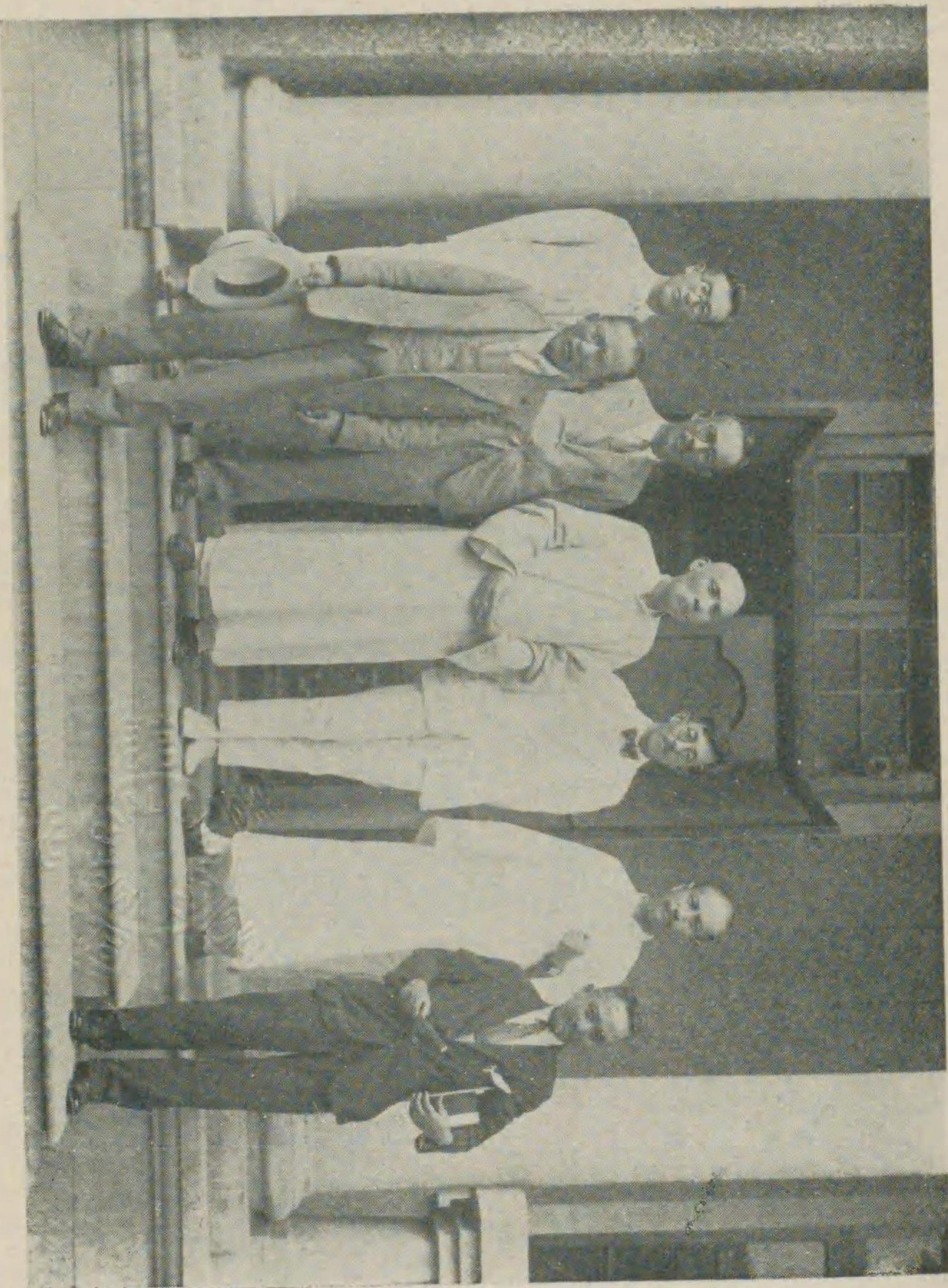
この間の事變ではかに仕上げた防禦工事がそのまゝになつてゐる、塹壕の上のチ
ーから鐵條網を越えて球をかつ飛ばすところが、いさゝかニユースヴァリユーがある
とおもふ。いそがしい。

百三十一、宣統帝の假の宿

ボン／＼鳴る銃聲を耳にしながら、いつものやうに數萬の觀客が群をなしてゐたと
いふ競馬場で、新井司令官の一行と分れて、日本租界にアウトをはしらす。
騒々しい支那街の一角を曲ると宮島街とかいふところにガレージの入口のやうな門
構へがある。門の戸は眞赤に塗られてある。毒惡だねといふと、張彪といふ人の持家
で淺草花屋敷のやうな興行場であつたといふ。これが誰あらう宣統皇帝の御座所であ
る。

門を入ると右手に三百坪ばかりの庭がある。和洋の草花に彩られるといひたいが、

向つて右より天野徳三、姚震、白井副領事、段祺瑞、下村宏、
久住勝三、吉村謙一郎



(左に於て關玄邸氏段日四十月七年三和昭) 行一者筆と瑞祺段

夾竹桃の花も散りがてに、盆栽の鉢がゴロゴロと散らばつてばかりである。

庭をよぎつて小階を上ると、とつっきの細長い一室が應接間になつてゐる。英、伊の兩皇帝ムツソリーニの三つの寫真が壁間にかゝけられてゐる。軸物は雙幅が二つ、一つは臣康有爲敬書とするしてあつたが、文句がおもしろいので覚えておいたつもりで忘れてしまつた。

左の一隅には卓と椅子を前に書架がならんでゐる。「御批通鑑輯覽」とか「御纂周易折中」とかいつたやうな本が積み重ねられてゐる。その一隅には置時計の音がチクタクと靜かに時をきざんでゐる。その横のドアを開いて寫真でおなじみの宣統帝は黒い支那服に、黒い帽子黒の色眼鏡をかけて、一人の侍者もなく、たゞ獨りはいつて來られる、筆者及び同行の吉村朝郵專務、天野、久住の兩社友及び白井副領事に對し順次親しく握手をされる。何といふ事もなく胸が一杯になつてくる。

筆者の北京會遊から李鴻章會見など、かびの生えた話について、自然の風光と唐代の

支那の藝術といふ上から、日本への漫遊をすゝめると、私はつね々日本は固有の文化と海外の文化をよく融合し消化していつた事に敬服してゐる、支那では今や凡て固有の文化は破壊するばかりで困つたものであるといふ事から、日本への旅行はかねがね望んでゐるが、どうもまだその時機を得ないと答へられる。それから話は朝日新聞社の今春の天平文化宣揚運動から、廢帝へのゴルフ勧誘の一席があつて、一行又握手を重ねて退場。

民國政府から年額四百萬元交付といふ約束もフイとなつて、數年來居喰ひをしてをられるなどいふ涙ぐましい話を耳にしながら、もと來し庭先にかへると合歡のたゞ一本薄紅色に匂うてゐるのが、ただなんとなく我心をひきつける。

百三十二、ポスターの北平

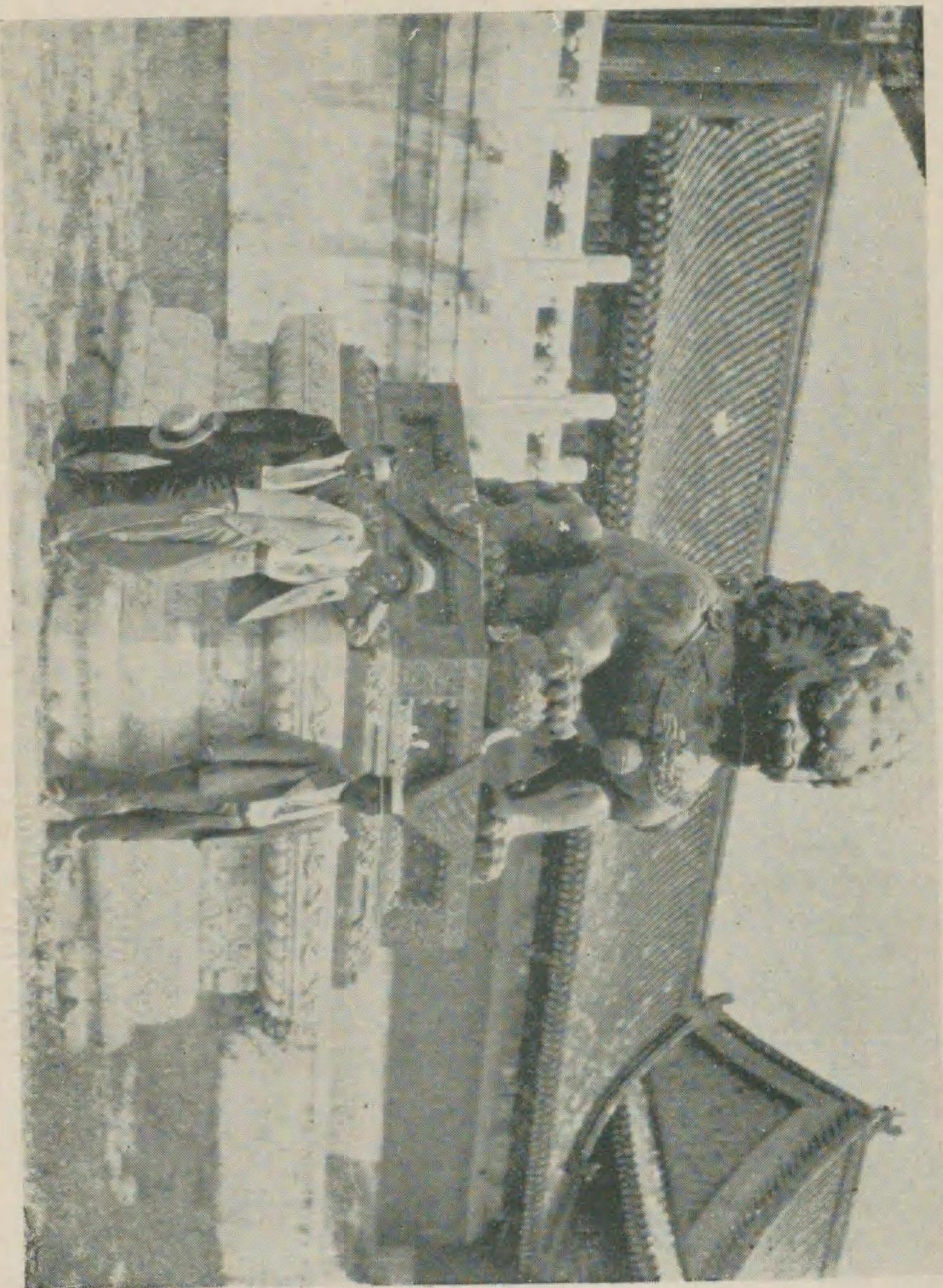
北京では王城も天壇も孔子廟もみな見料をとつて縦覽を許すことになつてゐる。

王城のうしろの北海の離宮も今は開放されて公園となり、青葉しけれる湖畔には餐館茶社は五龍亭のあたりまで軒をならべて、樹蔭にちらばれる茶卓の間を縫うて老若男女が三々伍々散策してゐる。その中には平民學校の奉加帳を持つて廻つてゐる毛斷嬢もゐれば、湖上には若き男女がボートをあやつりて紅白の蓮華の間を漕ぎ廻つてゐる。

更に中海南海を隔て、社稷壇の跡は今中央公園となり、孫文先生の號をかりて中山公園と改稱されてゐる。老柏鬱蒼と生ひ茂れる下に幾何十と知れぬ茶店、幾何百と知れぬ卓子、幾何千と知れぬ籐椅子が按排され群衆で人波を打つてゐる。脂粉をこらした女が、ところどころお客らしいのと打興じてゐるもあれば、只獨り卓によりて客待顔に秋波を送つてゐるものもある、兎に角小意氣な女が澤山眼にとまる。あれは女人かといふと、近ごろは一寸素人と區別がつかなくなつて來たといふ、よく日本といふ國にもある圖である。いやそのモボやモガの發展振りに至りては、東京や大阪などはタヂくである。中山公園の光景はまさしくバリのボア公園も跣足である。

支那も中華民国となりて内亂相次ぎ政局は鵜の目の如く轉々する、國民革命成功と
 いうて見ても、いはゆる巨頭が團栗のやうにならんでる。この先き一體どうなるだら
 うと、識者なるものは大に慨嘆してるが、男女一律平等とか婦女徹底解放といふボス
 ターが至る所に貼られてあるだけに、その昔は七歳にして席を交へざりし男女が、青
 春にして一堂の下に共學もしてゐれば共遊もしてゐる。纏足は素より滿洲婦人の頭の
 飾りも見られなくなり、黒い帽子をかぶりしも稀なれば、馬掛兒をつけしものもない。
 至るところモガが巻煙草を口にして濶歩しつゝあるのが眼につく、さりとはあまり
 にあはたゞしい變り方である。

北京はいまポスターの都となつてゐる。至るところポスターの貼られざるはなし。完
 成國民革命といふポスターもあれば、革命未成功同志須努力といふポスターもある。
 蔣總司令も南京遷都の旨を宣言して北京も北平と改稱された。遷都孫總理遺囑といふ
 ポスターも隨所に貼られてゐる。



北 京 舊 玉 城

政局は誰の手にどう移らうが今更驚く北京市民でもあるまいが、遷都となつてはまさしく何よりも経済的に致命傷である。公園などで連日遷都反対の民衆運動でもあるだらうと想像されたが、たゞモガやモボの行樂のちまたとなり、遷都といふ當面の死活の大問題には風馬牛であるとしか見うけられない。

軍隊さんの前には没法子……仕方がない……とあきらめたのか、遷都というても口先ばかりで實現せぬと高をくゝつてるのか、とに角從容として迫らざるところはさすがに支那である。しかしその悠々たる流れの中に日本より一足お先に失敬しつゝある社會世相のひらめきがところ／＼に看取せられる。古い詞だが百聞は一見に如かない。

百三十三、香山碧雲寺

北平に入城した蔣總司令は何よりも先づ孫中山總理の靈前に革命成功の報告祭を行つた。

當日國民黨の方から各新聞紙に發行禁止を申込んだが、そんな無茶な事はないと平日通り發行した、それならばと新聞紙は差押へられて一日おくれで配達に付せられたといふ。なぜそんな事をしたかといふと、當日の勞働者の服務を免じたいといふ事と、廣く民衆をこの報告祭に參列せしめたい爲であつたといふ。

萬壽山見物も昔は一日かゝりであつたが、今は自動車の便があり、半日をさきて優に觀賞をほし、にすする事が出来る。その昔義和團の亂後イタリー兵が駐屯してゐたが、はからずも今國民軍の宿營となつてゐる。二十八年振りの遊子にとりては不思議な廻り合せである。但し今日では見料一圓でいさこさ無しに見物できる。苑内至るところ茶店あり、歐式のホテルまで設けられてあるから、佛香閣上より北京一帶の廣野と西山玉泉山の連峰を展望し、玉蓮咲きみてる昆明池に畫舫を浮べ、湖畔に一夜を明かすもまた妙である。

萬壽山から更に玉泉山のふもとに沿ひ西に走れば、西山連峰の中腹に孫中山の遺骸を安置せる香山碧雲寺の靈塔が見える、この寺は今國民軍の軍隊宿舎になつてゐる。時は七月の眞晝である。山門にも樓閣にも廻廊にも樹陰にも、兵隊さんが算を亂して晝寢をしてゐる。五百羅漢堂内に入れば小暗き敷瓦の上に兵隊さんが足の踏どころなきまでに寢轉んでゐる。その中に案内僧が右にまたぎ左に爪立て、廻はる。おづくくと小氣味わるくもあとについてゆく。

これが普通なれば見物人の參觀を禁ずる。少くも中山先生の靈前に參拜する往還を除きては衆庶の入るを差止むべきはすであるべきが、兵隊さんはいたるところどころと極めて無雜作に起臥してゐる、その中へ見物人の雜然と入るに任せてゐる、そこに或る心安さが見られる。新聞の發行差止めと平仄の合はぬところが面白い。

碧雲寺の境内は中々廣い。大理石の石階が堂から堂につゞき、一番奥の高所には五座金剛の寶塔が聳えてゐる。見上ぐる高臺はみな大理石の巨材より成り、その四側壁間は種々の文様天部人像、獅子頭などを以て彫飾せられ、正面の下部中央の龕内には、孫

中山先生の靈柩その上に大額の寫眞が祭られて弔旗や花輪などに埋まつてゐる。參拜を終りて臺上に出づれば北平一帯の廣野は眼路のかぎりにはひろがり、近く玉泉山の高塔から萬壽山昆明湖の風光みな指顧のうちにある。いかにも展望がよい、觀光の客には西山ホテルを根城にして香山から西山の八大寺めぐりをおすゝめする。

百三十四、通 行 料

集權が強すぎると犠牲が多くなり深くなる、分權が強すぎるとまとまつた仕事は出来なくなる。大なる標的に進むといふ事と個人の權利の尊重といふ事と、そこにはなにか矛盾がある。

モスコとレーニングラード間の鐵道は眞一文字だといふ。どうしてかといへば時の露西亞皇帝の御前で、右にうねり左に曲つた數多い比較線につき、一夕利害得失の存する數々をならべ立て、その選擇につき議論の花を咲かした時に、皇帝は野も山も

川も町もすべてに遠慮なく、只一直線にと鶴の一聲があつて眞一文字の線になつたといふ、まあこれなどは專制政治の利といふ方に組み入れてもよいかも知れぬ。

北京ではなかつた北平の都に入ると、城内の道路はさすがに昔日の佛がなくなつてゐる、そこには驢馬や駱駝のつながりもある、しかし萬丈の黃塵を蹴立てた昔とは事はかり、電車がはしる自動車がかかる、その間をのそりくと縫ふてゆく驢馬や駱駝の光景は一寸面黒い。

北平から萬壽山に遊ぶには昔はバネなしの馬車で、頽廢した石道をガタコトと足腰を痛め、時折は頭まで打ちつけて、一日がりの仕事になつてゐたが、今は佛香閣に登り昆明湖に棹さして、優に半日の行樂を以て足りる、それはいふまでもなく自動車のお蔭である。

西山に向ふ道筋から左にそれて八方山といふ名の示す如き野中の一丘陵がある。萬壽山から玉泉山、香山から西山の八大寺、さては北平方面に點在せる喇嘛塔から、天

壇日壇月壇景山王城の金色のいらかなんぞ、いづれも指顧の内に見える、この八方山は北平から四五里もあらうとおもふが、之れも自動車のおかけでゴルフのリンクとして楽々とエンジョイされてゐる。

ところが自動車道となつてつぎ一つの挿話がある。それはこの八方山への西山街道は張學良の一令の下に出来上つた、それは張學良がテニス、マンであると同時に又ゴルフアールであつたからである、又萬壽山への街道は蔣介石の一令の下に出来上つた、それは此度蔣介石は北上して萬壽山にその部隊を屯營せしめ、その身は西山の碧雲寺に假居したからである。

そこで軍令一呵自動車道ができ上つた、それは道路敷の中央であつて、その片側には手の入らぬ舊道はそのまゝ残されてある。といふのは手を入れた道路を通過するものは、荷車自動車など、それらに通過料金を仕拂ふ、その五十錢なりの料金が拂へない又拂ひ度くないものは舊道を通ればよいのである、一寸面黒いぢやないか。

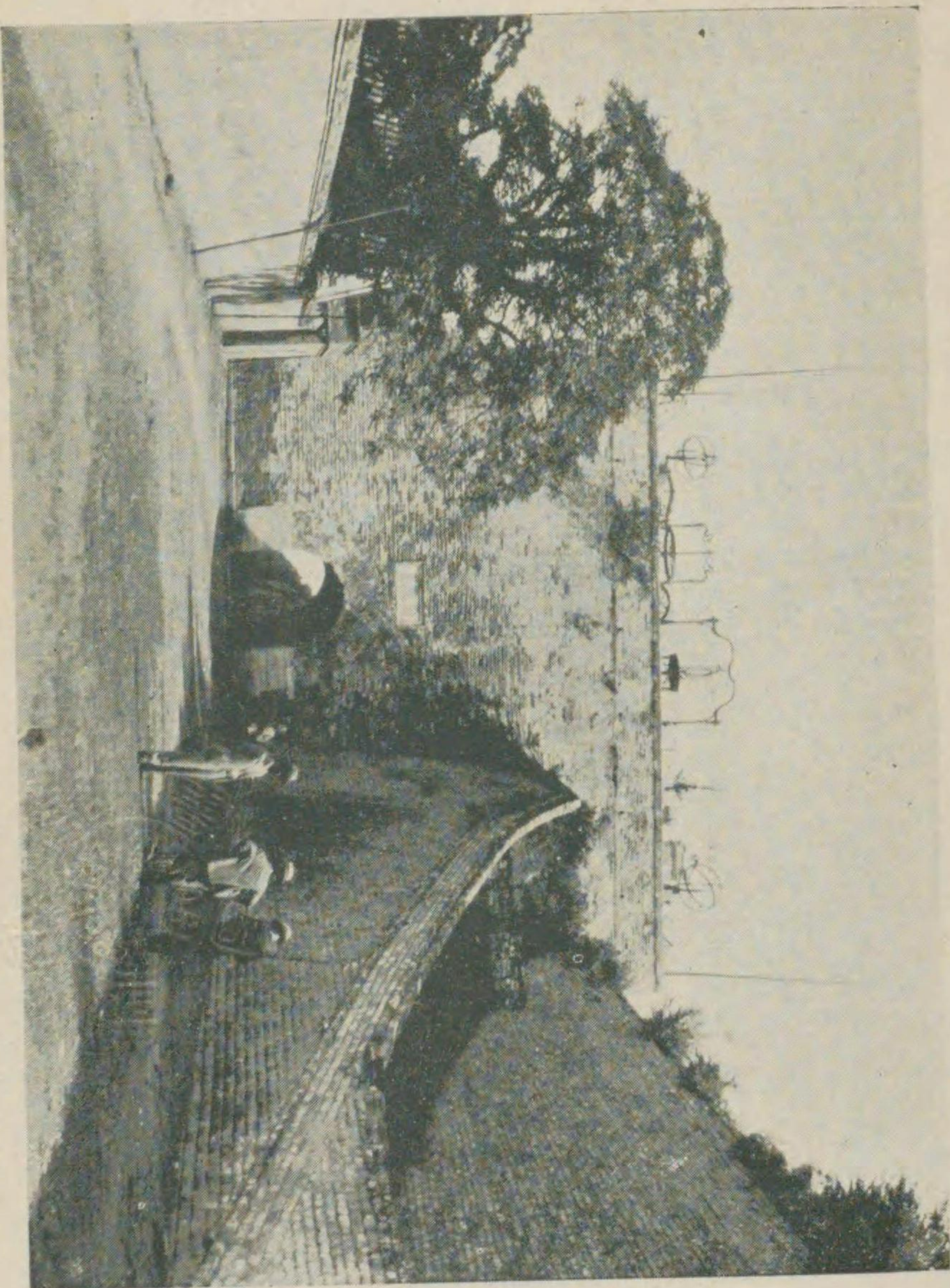
これにつけても思ひ出されたのは、大正十一年の春の事であつた、廣東市街の眼貫の通りには乗合自動車のはしる、その道筋には中程だけがコンクリートでペープされである、聞けば市長の何がしは英斷を以て市區改正で道路敷をうんとひろげる、一時は市民の苦情も八釜しかつたが、さて道路が廣くなると行人が多くなる、店さきにはお客もふえる、その上自分達の切り残されし地價はうんとあがる、そこへこの乗合自動車の出願がある、出願者に許可条件として自動車の通過するところをペープさせることゝなつた、ために近頃は市民こぞりて此市長の英斷に賛辭を呈してるといふ。

由來交通の發達は次第に通行料金徴收の撤廢を促進したが、その結果は一利一害であつて、ために改善の手續のおくれる事が多い、脱線し序でに一例をあぐれば、紀州熊野の新宮町あの人口三萬もあらうといふ新宮の街に沿ふて流る、熊野川である、こゝには橋がない、これが和歌山縣と三重縣の國境でなければ、いづれかの縣で假り橋にしても架設されるのであらうが、國境であり國道であり國費はこゝまで手が届かぬ、

縣費では荷が重すぎる、なかに國費でも縣費でもよろしい架設する、橋渡の賃を取るとしたら、お客にせよ貨物にせよ車馬にせよ大變な數だから、さうさう重荷にしなくともソロバンが立つのだが、それが無料制に縛られて今日までまだのびくになつてゐる。通行料はとつてよいぢやないか、ロハにしてといふてはいつの事になるか分らない、一日でも交通の利便は早く開けるにかぎる、張學良や蔣介石の將軍たちが命令一下道路を改修する、あとは通行料をとつてゐる、え、ぢやないか、面黒いぢやないか。我國では高貴の方の見えた折を機會にして交通の改善される事がある。その外は一切ソロバンヅクである、しかもそのソロバンが黨争によりてをりく／＼桁ちがひになるから堪らない。豈それ慎しまざるべけんやである、考へざるべけんやである。

(三、一〇、一三法律春秋)

百三十五、北京の觀象臺



臺 文 天 壁 城 京 北



光緒二十六年、日本の明治三十三年、義和團の亂ありて後、北京の王城をはじめ萬壽山の離宮など見物したときに、そこに一物として持ち去りうべき何物も遺されてない、否持ち去り得ざるものは大きな一枚ガラスも鏡もみなひゞが入つてある、大理石の浮彫なども丹念にたゞきこはしてある。分り切つた事ではあるが、戦には金輪際敗けるものではない。

この感を一層深くしたものに觀象臺がある、北京内城壁の南東角樓の上に元朝の至元年間欽天監郭守敬の製作にかゝる渾天儀銅球量天尺をはじめ、清朝康熙年間に増設せられた天體儀、赤道儀、黃道儀、地平經緯儀など据付けられてあつたのが、それがあけて獨逸軍の手に掠奪された。學問には國境がない。しかも觀象の具である、之を分捕るのは非道であるといふので、當時かなり問題になつてゐたから、當時觀象臺を訪うて親しく慘虐なる戦禍のあとを弔つた事がある。

越えて二年、その分捕られし觀象儀を伯林ポツダム離宮の内苑に見たときは、少

したとへが無理かも知れぬが、胡にとつぎし王昭君のそれにも似通うて更に無量の感慨に打たれた事であつた。ところがその後分捕られた品々が北京に逆戻りして目出度く元のさやに納まつたと傳へられてゐたから、自分としては宿縁浅からぬ觀象臺を一目なりとも見物したい。

七月十七日此思出深き觀象臺を約三十年振りに見舞つて見たが、城壁の登り口が閉されてある。壁上にとりつくろはれたる觀象儀はありくと見えてる、まさしく王昭君は高樓の上に其姿を現はして居るが、高嶺の月とあつて手にはとれない。心残して觀象臺をあとに天壇にむけアウトを走らせた時、同乗の案内者は城壁に露天になつてる觀象儀などもぎとるのはまだ生やさしい方で、此前馮玉祥が北京王城に乗り込むと、眼星しい寶物はみな掠奪して其額實に何千萬元に上つたか知れないといふ評判であり、之れを今ながしが佛蘭西方面に賣り込みにいつてますよといふ。さういへば此間張作霖の奉天引揚には列車といふ列車の車輛は京漢線のも津浦線のもおかまひなしに、

京奉線を東行したが最後はみな片便りで戻つて來ない、毎日ガタゴト奉天へむけ走つた列車は荷物ばかりで山の如く積まれて、兵隊さんは皆歩行とある、その又荷物には椅子あり、卓子あり、毀れた風呂桶まで積み込んであるのだから、とても因業なやり口であつたといふ。まあ話は半分に聞いても内亂も外亂も亂は一なり、豈獨り獨逸をのみ責むべけんやといふ感を深くした。

支那よりかへりて未だ旬日ならず、八月五日の新聞聯合の北京特電は新聞に次の如く報ぜられてる。

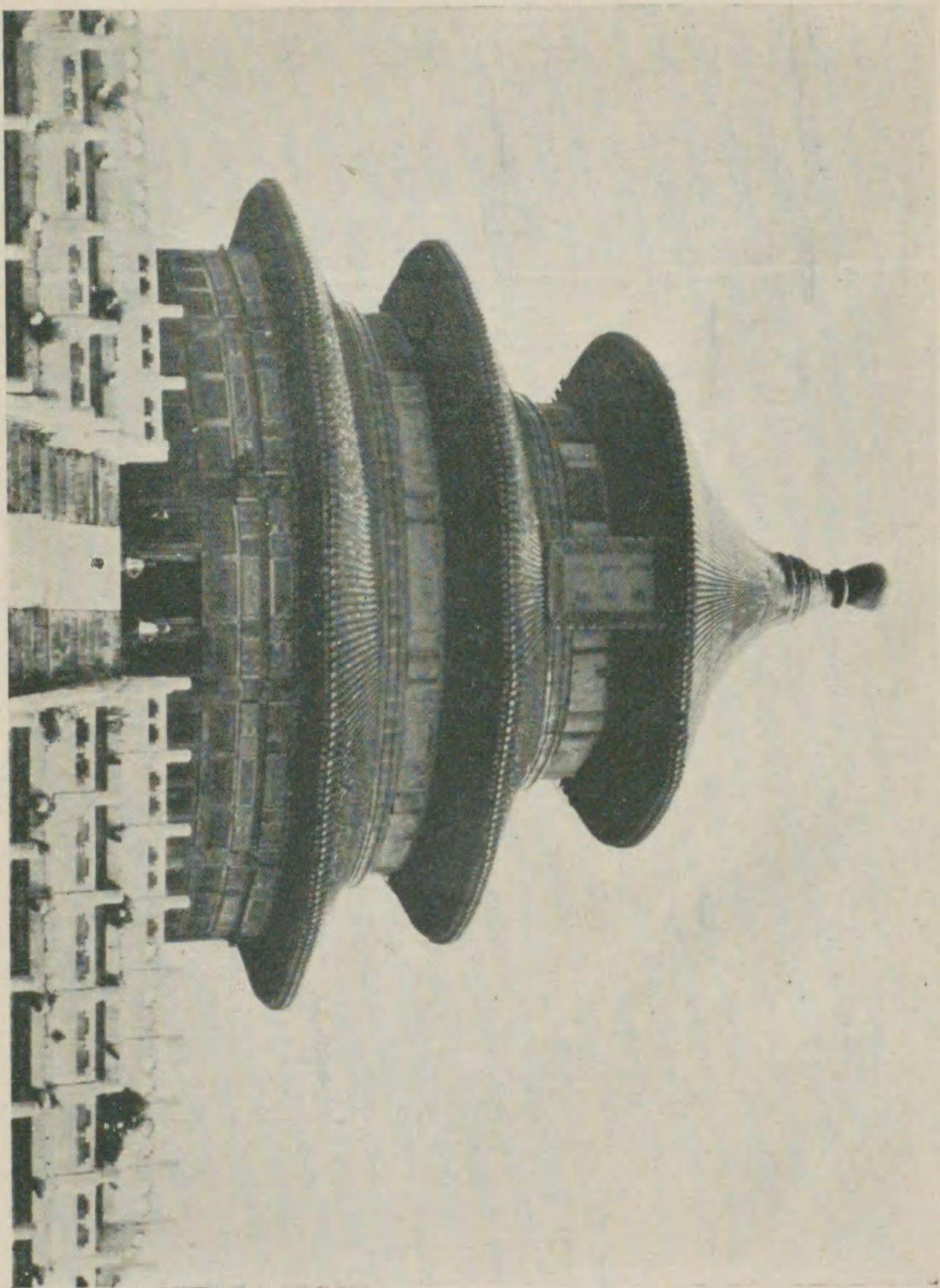
革命軍の師長

東陵をあばく

盗んだ寶物三百萬元北京警備司令犯人を釋放す

(北京五日聯合發電) 北京の東方九十マイルの地點にある乾隆帝並に同皇后の陵として有名な東陵は完膚なきまで發かれ、貴重品、裝飾品、祭器、さては靈柩に納められた金銀珠玉等金目の物は一物も残さず盗み去られ、慘狀を呈して居るが、右は褚玉璞氏の舊部下で革命軍に改編された師長譚巨鄉氏が當地の有力者と共謀して軍隊約五千名を使つて行つたもので、その財寶の價格は内輪に見積つても三百萬元を越える見込だ、贓品賣捌きのため來京中の譚氏の弟譚松鄭氏は、支那骨董商の密告で警備司令張蔭梧氏の手で逮捕されたが、張蔭梧氏は何故か逮捕後譚氏を釋放して仕舞つた、文物維持會及び滿洲人は、司法當局に犯人の嚴重處罰方を運動しつゝある。天津で賣捌かれた寶物は相當の額に上ると

或る特電にはその價格四千萬弗に上るとある、國寶の評價であるから三百萬元でも四千萬弗でもよろしい、大仕掛に約半ヶ月に亘り東陵をあばいたことは事實である、かうなると僕の觀象臺の思ひ出などは至つて簡単な手輕な瑣事の如く思はれてくる、



壇 天 京 北

觀象臺で感傷的になつた氣分は今くわんしやうだいは觀賞的くわんしやうてきになつて來たきような氣きがしだして來た。
(昭三、九月號公民講座)

百三十六、北平行吟

白河舷上

甲板かんぱんの片隅かたぐみにならぶいくさ馬

そほふる雨にみなうなだれてあり

河をのほる船ふねの上の人と岸きしの人と

高たからかにかたる好々へおくとかたる

北平の街

兵隊へいたいの長きつながりあとの方は

銃じゆうを持たねば手ぶらでぞめくも

日傘ひがさを脊せには負おひつゝ銃じゆうもたぬ

兵士へいしの群むねがぞめきてつゞくも

孔子廟

廣庭ひろにはにしきつめたる石のはざまより

すくくとのびし夏草なつぐさの匂におひ

萬壽山

玉泉山ぎよくせんざんのラマ塔の影はわが舫ふねの

うごくがまゝに搖ゆれてありけり

八方山行

うづくまる小さき駱駝らくだの脊せなの上に

腮あきをのせをり大き駱駝らくだの

球たま飛とんでまさまにその脊せにあたれるを

駱駝らくだはすまして動うごかざりけり

胞馬廠行

長々ながしき貨車くわしやのつながりに道をせかれ

きよとんと立てる駱駝らくだのつながり

寢轉ねころんだり傘かさをさしたる兵隊へいたいさんを

のせたる貨車くわしやのゆるらと走る

百三十七、生々しき戦跡

高密事件かうみつじけんのあつた直後であつた。青島から鐵路二百五十哩を夜行汽車やかうぎしやで通して七月二十三日の早朝に濟南城さいなんじやうに入る。

古く親しき友齋藤旅團長、黒田參謀長、末松聯隊長の諸氏に迎へられて先づ司令部へ、それから領事館野戰病院事務を取扱つた同仁會の濟南病院に案内される。おひるはスタインといふ獨人經營のホテルで福田師團長の招宴を受ける。午後は菊池參謀、田畑副官の案内により生々しき戰跡の見物に出かける。

濟南に來る者は更に南下して曲阜を見、泰山に登るさうだが、今は交通が絶えてゐる、せめてもと城外約三里にして黄河を見る。豫定の如く廣野の中を赤濁つた水が流れてゐる。問題になつた鐵橋が對岸鵠山のほとりへ長蛇の如く横つてゐる。黄河からまた濟南城の戰跡地に引かへす。小西北門に彈丸雨下の中を率先勇躍爆破口をよち登つて城壁内に突入した外山旅團第五十聯隊の中島曹長や北澤軍曹などの殊勳、さては濼源門に迫りて爆破作業を遂行した齋藤旅團の小宮山工兵少尉の部隊が決死的功績なんど、我勇士は今更ならねど、小西北門の壁上で我機關銃の前に軍樂を奏しつ死屍を越えて突貫すること二十回に及んだといふ南軍劉峙の隊だけは又特筆に値する。

張宗昌軍の本據である督軍公署には今我軍隊が屯營してゐる。その後園にある約三十八(?)の部屋は、いづれも張將軍の内房になつてゐた。一行が山東名物の西瓜に枯腸を醫した部屋は第三號夫人室とある。屋蓋付のとても大きな紫檀造りの寢臺が横はつてゐる。この部屋の將校殿は立ちて見つ寢て見つ寢臺の廣きを味はうてゐるらしい。濟南はまさしく暑い。暑いから暑いねといふと、いや大へん涼しいといふ。さらに反譯すると百二十度前後に上つた時分に比して凌ぎよいといふのである。しかし兎にも角にも九十何度に上つてゐるから玉の汗がだらりと流れづめである。尤も凌ぎよといふ軍人さんも皆汗は戎衣を通してにじんでゐる。

夜西田領事の晩餐の宴果て、バルコニに出たが、十時を過ぎるも主客手に團扇をはなさなかつた。全くあつた。炎熱と戰ふ遠征の勞はその境にあらざれば想像ができぬ。天津でも山東でも至るところ我社の、軍隊への慰問袋に就き感謝の詞をうけた。所によつてはために酒保が頗る閑散になつたといふ。又あまりに一時に分配してはと一

部を保留してゐるところもある。せめては留守の部隊に裾分けしたいといふところもある。かたぐ直々謝状を差出すやうに命じてるがいかゞであらうか、どうかくれぐれも寄贈して下さつた皆様によろしくとのことであつた。

百三十八、宣傳下手？ 濟南事件

支那の宣傳上手はかねぐ聞いてはるたが、北支一帯宣傳ポスターで貼りつめられた街々を見て、今更ながら感心させられ、同時に我宣傳下手といふ事にも少からず驚服された。

日本を出る時、外國の新聞記者から日本の新聞はどうしたのだ？ 日本人が虐殺されたので出兵軍隊の活動に移つたといふに、日本の新聞には日本軍隊勝利支那軍敗北の寫眞ばかりぢやないか。それぢや世界の同情をひかぬぢやないかといふ。つまり日本人の慘虐な目に遇うた方の宣傳が一向にないといふのを笑ふのである。

濟南で支那側が日本人虐殺の寫眞を以て支那人なりと宣傳した。その死體が足袋をはいてるのでやうやう日本人といふ辯明がついたが、しかし支那人虐殺といふ宣傳がかなり支那や外國にはひろがつたらしい。

日本といふ國では在留民が裸體で城内を引ずり廻されたり火あぶりに遇うたり、あらゆる凌辱をうけたがその宣傳は一切禁止されてる。新聞掲載はおろか、門司の税關では八釜しく荷物を検査して濟南醫院長はじめ多くの旅客が持ちかへつた、日本人の虐殺された寫眞は原板もろとも皆沒收されたといふ。

政府當局が日本軍が何故に公憤を發するに至つたかといふ理由を證明すべき手段を絶滅するために、如何に苦心しつつかあるかといふ事はこの一事でも推しはかられる。

黒いものを白いとさへ宣傳する世の中に、白いものを白いとさへ宣傳せぬ。いや宣傳する事を嚴重に取締る。これが出兵すべきにしない、戦ふべきに戦はない、ひどい目に遇はされても忍ぶべからざるを忍んでるといふ時なれば、そのひどい目に遇つた

事を隠し立てするといふも多少は聞える。既に出兵し、既に戦ひ、なほかつその戦ふに至る所以の道を明にする事はきつい御法度とある。宣傳下手といふは宣傳せんとするも下手であるといふ事なり、宣傳すべきものを手をかへ品をかへて差止めるに至つては全く以て所存のほどが分らない。不思議とかいふ詞はこんな時に使ふものなるべし。

百三十九、濟南行吟

濟南

新しきこの濟南の戦跡に

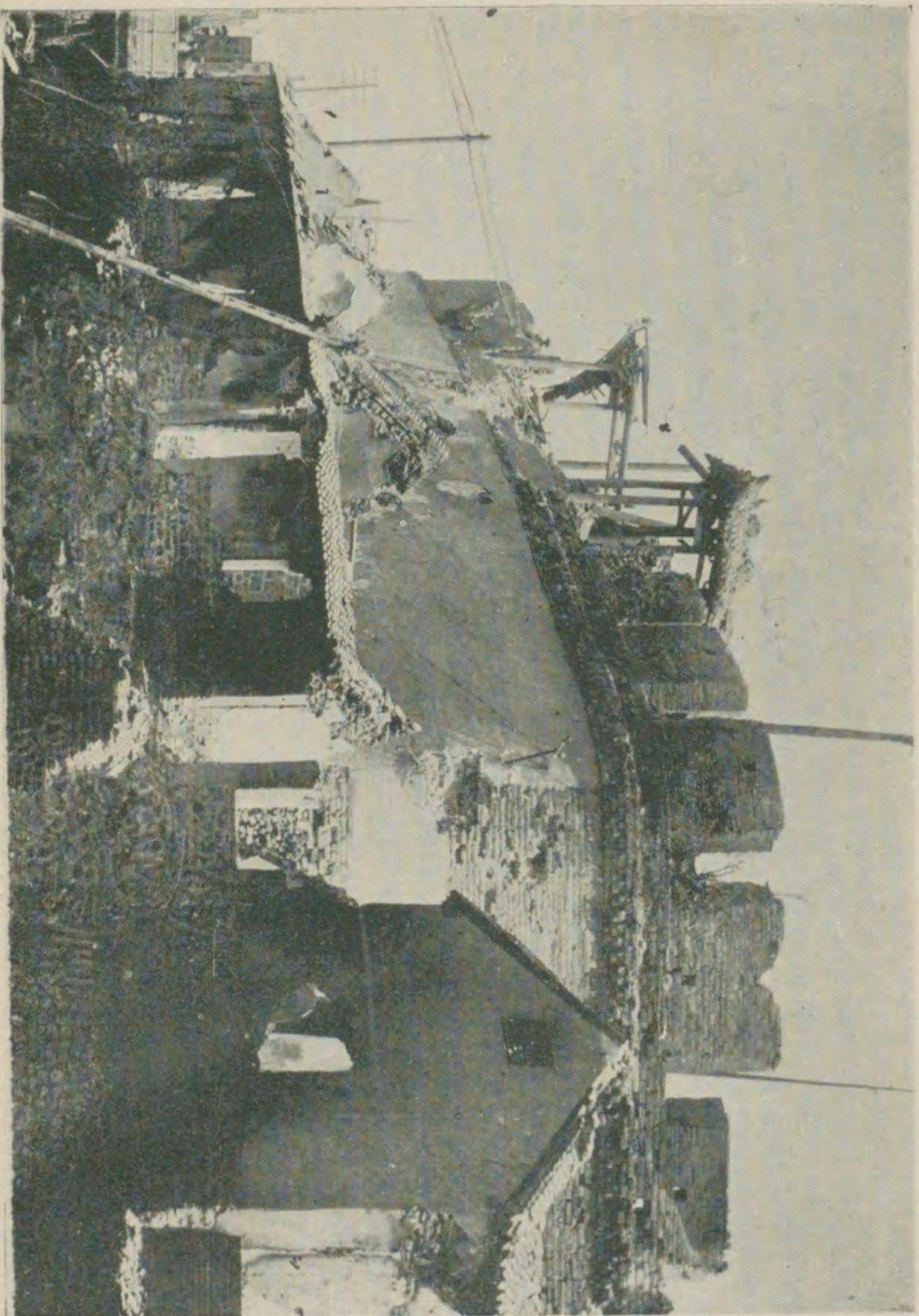
ことばもなく君の手をにぎる

バルコニーの夜はふけたれど暑さつよし

團扇もつ手の疲れをおほゆ

(齋藤瀏少將に迎へられて)

(總領事館にて)



跡戦さし々生の南濟

黄 河

向ふ岸は眞夏のひるを人はあらず

土くれの家散らばれり見ゆ

濟南城小西北門

戦のあとをぞ見入る眞夏のひる

やぶれし土囊の間をふみつゝ

その昔鐵鉞が死もて守りつる

濟南の城もつひに落ちにけり

杜子がうたひし歴下の亭と指させど

柳をしけみ吾には見えす

百四十、山東問題

朝鮮から滿洲、更に北支から山東の一角を巡遊した。知らん者には知らん、知つて
る者には知りすぎてゐるやうな事を二三書きつけて見る。

日本といふ國には忠君愛國を業とせぬまでも、忠君愛國を賣りものにしたたり、看板
にせぬまでも、年中口先ばかり國家を憂へてゐる者が少くない。それが滿鮮方面にく
ると矢張り中々多い。眞剣にそれが日本の爲なりと思ふてゐるのか、日本の爲なりと
自己催眠にかゝつてゐるのか分らないが、あまりに先の見えなさすぎる嫌ひがある。ま
つけぢやないが物事もあまり近間に見ると見えなくなる。

支那の政局がぐらつき通し、盛衰興亡たゞならざる有様を見ると、己んぬる哉、中
華民國と言ひ度くなる。しかし一度足を天津に入れる、北京に入れる、市中の光景は
事々物々駈足で進みつゝある。

駱駝はのそくと舊によりて城壁にそつて列をつくつてゐる。しかし今までの黄塵萬
丈の北京の街はコンクリートで固められてゐる、バネ無しの馬車は姿をかくして、電車

の音がきしつてゐる、驢馬の鈴の音は絶えないが、自動車のラツパの音に押されてゐる。
纏足も滿漢の髻も姿をかくして毛斷嬢はシガレットの烟を輪に吹いてゐる。

憐むべし、内亂絶えず、兵火止まざる國土をといふわれ人を尻目にして、軍國主義
のともがら何をかいふ。憐むべし、自由平等の空氣を吸はざる徒はと反り身になつて
ゐるものは、蓋し中華民國婦人の心意氣であらう。

京に入りて閱兵するや、宋美齡夫人が蔣將軍と其行を共にする。

よいのわるいのはそれは見る人の評するところにまかせる、もし日本は先進國で
ある、支那はまだ舊により眠つてゐると思ふ人あらば、宜しく足を一度中山公園に入る
べしである。

曰く蒋介石、曰く馮玉祥、曰く閻錫山、曰く李宗仁、曰く李濟琛、曰く誰、曰く誰
四巨頭がどうの、廣東派がどうの、廣西派がどうの、浙江閻元老派と共產系、何黨と何
派と、所謂國民政府の中に朋黨比周して中心が動きづめである、

成程東三省の軍隊も直魯の軍も引き上げた、三民主義は南方を統一した、青天白日旗は至る處に翻つてゐる。しかしそこに中心がない、そこに暗中摸索がある。そこに蘇秦の横議がある。そこに勢力の平均、黨閥の牽制、排擠と連衡、あらゆる權勢爭奪の場面が時々刻々に展開されてゆく。

この自己頭上の問題に直面して、四六時中極度に興奮し、緊張し疲れ切つてゐる彼等の心持は對外よりも先づ對内である。その對外も對内の爲めの對外である。内地盤を築き上げ、その體面を保持し、その聲名を墜さざらんが爲の對外策は、理も非もない。たゞ強氣一點張りで條約打切りとまでかけ聲をあける。さうした立場にある人々に對し、日本政府はそれ山東問題をいかにする、それ謝罪、それ賠償をといふ。

理も非もない、民國の當局には何よりも先づ自分達の對内の立場が焦眉の急である。山東省青島濟南の内地人達はいろくくとその立場につき陳情してゐる、それもよい。いや此際黙つてゐられよう道理もない。

山東鐵道……四千萬圓の元金返済に一厘も納めない山東鐵道や、商埠地問題や青島の市制や、關稅や埠頭稅や陳情すべき事はあまり多い、それもよい、此の山東問題の談判には、山東の日本人代表を顧問とすべしとかいふ、それもよい。

その交渉は日本の東京に於てすべしと註文してゐる、そんな事まで差出ては、それは脱線しすぎてゐるといふよりも、一體今の新國民政府が、まだ自分達の地形も固まらないのに、誰が謝罪せよ、賠償せよといふやうな交渉にぶつかるべく東京まで足を運ばせねばならぬか。

親切も度をすぎると干渉になる、行届きすぎると却てうるさがられる、潔癖といふか、几帳面といふか、こせこせするといふか、入念すぎるといふか、兎角日本人のやるすべてはそこに法三章といふボカシがない。融通も方便もない、目的よりも手段にこだはりすぎる、劃一主義規則づくめで親切を賣り物にして、厄介視せられ面倒臭がられる。内地しかり、朝鮮しかり、滿洲しかり、豈それ山東もしかからざるを得んや。

青島濟南はもとより、山東鐵道沿線一帯、そこに日本の軍隊が立のいたあとの壓迫を恐れてゐる日本人もあれば、肅正なる日本軍の態度に感謝しても、いつ立退くか知れぬと思へば、うっかり親日の顔も見せられぬといふ土地の人もある。しかし津浦線といふ大動脈、少くとも天津への鐵路が遮断されて見ると、一番困るのは北支との交通杜絶である、商賣の行きつまりである。

秋毫も犯されない、身體財産の安全は絶対に保障される、ありがたいにはありがたい、支那勢力の下に苛斂誅求されることをおもへばとてもありがたい。然しいかに身體財産の安全が保障されても、その財産は喰ひへらすばかりで金もうけの道が絶えてはありがた迷惑である。一錢の微といへども失はれざるに越した事はない。しかし一萬圓もうかるなら四千圓取り上げられてもよろしい。此呼吸が日本のあらゆる階級によくのみ込めてゐない。

(昭三、十一月號海外)

百四十一、日光丸六勇士の遺骨

北支那第一の避暑地として風光絶佳の稱ある青島。その昔宣教師が一人か二人殺されたといふのでドイツの手で驚づかみにされた青島。そのまた昔からイギリスの手にある威海衛はそのまゝ居直つてゐるが、日本の方は氣前よくのしをつけて返上に及んでる青島。

とてもはろくくと廣い膠洲灣をへだて、えんくたる半島の中ほどには大珠小珠の連峯聳え、東方には名山の稱ある浮山、嶗山あり、海に迫れるイルチス、モルトケ、ビスマークの丘腹には競馬場あり、ゴルフリンクあり、坦々たるプロメナードはドライヴによし散策によし、濟南よりかへりてグラントホテルのベランダに出で、卓によれば海氣肌に涼し。風光の美に加ふるに古い同窓の安満第三師團長、ブタベスト以來なじみの三宅旅團長、ワシントン會議の折の河相領事など舊友のあるあり、これで

濟南の問題などのイサクサがなければ青島の旅の宿はさぞかし肩のこらぬことなるべし。

七月の二十六日日光丸にて歸航の途に上る。縁といふものは不思議なもので昨年の夏東京朝日の催にかかりし下田大島八丈を巡航した海上夏季大學はこの日光丸であつた。この船で高密に近き周陽集の戦ひに斃れたる山田看護長をはじめ五名の上等兵の遺骨がおくられる、中甲板には花環は何十となくかざられ、祭壇には香煙がゆるく流れてる。岸壁には兵隊が列をつくり師團長はじめ將校がきら星の如く列んでる。青島の在留民は老幼男女の別なく七月の眞ひるを何千人となく山をなし、扇子のひらめきは蝶のむれとぶに異ならず。いざ出帆となると遺骨をつゝみし箱は僚友の手に擁せられて舷側にならぶ、喇叭の哀しみの譜が吹奏される、劍光閃くところ合掌黙禱の群衆がまざくと見られる。船の人、陸の人共に慘として語なく、たゞ涙がある。

凡て土地を離れては感興がうすくなる。六勇士の遺骨をおくるこの光景はとても内

地の人の想像だになき事であらう。この度巡遊して朝鮮といひ、滿洲といひ、北支那といひ、至るところに我内地に引かかつた大きな時事問題がこてくある。内地でも相當氣にはしてるやうだが、矢張り二階から眼藥なり、船の嫌ひな日本の海國男兒は百の説法より先づ新しくその地を踏む事なり。二ヶ月の漫遊至るところ歓迎になり一方ならぬ御世話になりたりこゝに筆をおくに當り楚人冠と共に厚く御禮申上ぐ。

(落穂集終)

空の旅エピソード

一、飛行機不安

飛行機々々と口癖に航空の奨励發達を力説してゐる連中でも、それでは君は乗つたのかといへば顔を縦にふるのはどうかといふと少ない。日進月歩の飛行界の状況は折々新聞雑誌などに見えるが、そんな記事に眼を通す人は少ない、たまく、突發した事故が三段抜きかなにかで新聞紙にのせられる、やれ誰が死んだ、怪我をしたといふので、飛行といへば皆事故ときめられてしまひたがる。せめて所澤や立川の飛行場が代々木か芝浦か鶴見邊にでもあれば、いかに飛行の安全であるかといふことが、日日幾十萬の人々の目にふれるのだが、立川では航空になじませるべく東京からあまりにかけはなれてゐる。まあこんなことを書き立てると際限がないから、ここに飛行挿話とでもいふものを少し書きつけて見る。

朝日新聞社の東西定期航空は大正十二年一月に開始してから、初め一年は毎週一回その後は毎週三回づつ、東京大阪間を飛行し、既に往復千四百五十回に亘つてゐる。しかもその間事故といふたら一回もない、試験飛行の事故は七回あつたが、それも始めの二年間のことで、そののち今日に至るまで六年間を通じ、その間一回の故障も起らない、尤も時には天候不良で出發延期になつたり、途中不時着陸をしたことはある。あの何千何萬噸の船だつてある事である。不思議でもなんでもない。今日のところ機械といひ、飛行士の技倆といひ、ことに空路に精通してゐる點から見て、危険率から推せば汽車電車自動車の方が却つて多い位だとおもふ。それでも飛行機となると、百人が九十九人まで首をかしげる、そのかしげ方をここに二三披露して見る。

二、一家もろとも

ドルニエー・コメット、ネビヤライオン四五〇馬力及びドルニエー・メルクールB・M
 ・W六〇〇馬力の新装成り、いよく東西旅客輸送開始の記事が新聞紙上にあらはれ
 ると、誰よりも先に乗せてくれと注文を出したのは、當年十六歳になる、うちの獨り
 むすこであつた。

『よしおとうさんと一緒に乗つて東京見物に出かけやう』といふと横から妻は口を出
 して

『おとうさんとお前は別々に乗つて下さい』

『なるほど。こいつは理窟だ、一緒におつこちたらたまらんからなあ!』

『全くですよ、どうしても一緒にといふなら私も一緒に乗せて下さい』

これは全く一理も二理もある、少くとも危険なりと相場をきめてかかれれば當然すぎ
 るほど尤千萬な次第である。

楚人冠はアサヒグラフの誌上に檀野禮助君の子供が三人、大原の海岸で舟がかへつ

て一時に水死した、あの悲惨な出来事から己れの子供二人を神田の一つ病院に入れ、
 十二年の大震災に一緒になくした凶事に想到し、岩崎家の先々代の夫人は彌太郎彌之
 助の二人の兄弟は、なるべく一緒に遊ばせなかつたといふふる事を筆にしてあつたが、
 これが入院でもなし、乗船でもなし、飛行機上の人となる、しかも東京大阪の間を飛
 ぶといふ、事實は小舟の方が却て危いにしてが、女房は自分はこのこされて、亭主と子
 供だけ一緒に飛んでゆくのは御免だといふたに不思議はない。

三、優曇華の花

今夏八月上旬のことである。東京朝日の同人が、それ／＼手分けして關東から信越東
 北一帯の地を飛行機で訪問する事になつた。第一日は東京から高崎前橋の二市を訪問
 し、淺間山上を飛んで松本市に外れ、更に中央アルプスの連峰を眼の下にして、焼ケ
 岳穂高より白馬岳まで大空を縦走し、越後高田の町に落ちつく段取りになつてゐた。

この第一日の空中訪問記は鈴木文史朗の名により、其才筆は東朝の紙上を飾つて既に周知の事實となつてゐるが、その事前に君の妻君は夫君の搭乗と聞いて、これがアルプス連峰の航空とあるだけに内心氣にかけてゐたらうが、夫の氣質としてとめ立ても出来ずそのまゝになつてゐた。ところが二三日経つて鈴木家の電燈に優曇華の花が咲いた。優曇華の花が咲くとなにか變つたことがあるといふ。氣になるのが夫のアルプス航空である。たまりかねて夫に優曇華物語のくさりを言上に及び、アルプス航空につき再考を求めたが、文史朗君かんからくくと笑つてそのまゝ、出社に及ぶ、社中同人に今朝うちでこんな話が持ち上つてね……と笑ひ話に出すと、その中のある物識の曰く――

『そもく、優曇華の花に二種あり、植物性のものに咲くときは吉事あり、礦物性のものに咲くときは凶事あり、それ電燈は礦物性なり、豈それ恐れて慎まざるべけんや』といふので眞顔になつて首を捻つたさうだが、どうも今更優曇華の花が咲いたとて中

止ともまるらない、さていよくアルプスの航空となる。われらも爆音勇ましく、淺間の高嶺を越えて、虚空はるかに消えてゆくのを輕井澤から見上げたのであつたが、アルプスの連峰は白雲にとざされやすいのに、此日はまれに見る澄みきつた大空に思ひのまま機上よりよい寫眞を撮影する。一時間足らずでアルプスの連峯を賞觀をほしいまゝにする、大成功で一行七人無事高田の街に着陸した。これがもし凶事でもあればそれはぬ事ではない、優曇華の花が咲いたさうだと繰言の好材料が出来上るはずであつたのだ、尤も一行七人中ほかの連中の家にも優曇華が咲いたのかどうかそれはいまだに聞き洩してゐる。

四、築港の五重の塔

大阪では八月の二十七日城東練兵場で旅客輸送開始の披露祝宴が開かれた。關市長湯川寛吉の諸氏が先發で大大阪の空を飛ぶ、筆者も林師團長、力石知事、川崎男爵と

同乗して飛ぶ、うちの子供も同人の子供連と束になつて飛ぶ、これはたゞ大阪の上空を飛んだといふまでであるが、大正九年三月十七日所澤で依田忠明君によりホールスコット百五十馬力の中島式で風速十メートルの空を飛んでからモウ九年振りになる。その間飛行士の熟練もさる事ながら、飛行機の發達といふものは大變なものである。箱入りの中で籐椅子にもたれ、談笑を交しつゝ見るく九條から築港に出る、おや此邊に五重の塔はをかしいなとおもふともう天王寺の上に来てゐる。早いのはいふもくだであるがほとんど揺れない、揺れないといふては誇張しすぎるか知れないが揺れが少なすぎる。

森永キヤラメル君夫妻は更科そばと同乗東京から着陸する、披露の席上に機上にて認めた原稿を手にして一席辯じる、東京への歸りまで又機上の客となつたのを見ると全く飛行が氣に入つたらしい。

五、更科そばと大阪ずし

九月七日は東京立川の方で披露の宴とある。大阪の披露には麻布永坂の更科そばを飛行機に積み込んできた、今日は大阪壽司を積込んでゆく事になつてゐる。社の村山長舉君と外に若夫婦の一组と四名、これがほんとの壽司詰といひたいが、ゆつくりと籐椅子にもたれて機上の客となる。

機はドルニエールメルクルBMW六〇〇馬力、飛行士は新野百三郎君である。

縁といふものは不思議なものでこの六月の五日の事であつた。張作霖將軍の搭乗列車爆破の寫眞を、平壤で汽車から受取つて大邱に飛び、更に一氣に大阪まで乗り切つた『初風號』を大邱の旅先で見送つたが、その初風を操縦したのが又新野君であつた。此日の航空には壽司積込のため妻の同乗出来なかつたのは遺憾であつたが、何分沼津以西は雨とある、沼津測候所の報告が一番悪い。といふて立川は晴天とある、お客さんはみなお待かねである。吾々はいつでもよろしい、大阪壽司がおまぢかねである。

六、鈴鹿越えず

測候所の情報は次第によりしい方である。まあ行ける處まで飛ばさうと、九時發の豫定が十一時近くになり城東練兵場をあとに立つ。

見る／＼全く見る／＼である。生駒山を眞下に見くだして大和國原に出る、この大和國原が十分立たずにバスする、右に奈良の若草山東大寺の屋根が見えてると指さしてる内に、はや木津川に沿うて機は笠置山の上を飛んでゆく、上野を経てからが、風も吹きすすんでるらしい。青田の穂波のはけしくゆらぐのがあり／＼と見える。その内雨脚はいよ／＼しけくなる。白雲のきれ／＼が車窓をかすめて飛ぶ、大けさにいふといささか物凄くなつて來た。ところによりてかすかに雲間から日の光りがさす、なによりも珍しかつたのが虹である。虹は珍しくないが機上から下に遙かに虹を見下したながめである。

あれが虹かなどと珍しがつてる内に雨雲の中に入つて何んにも見えなくなる。

何んにも分らないといふ事はいい氣持なものでない。機ははや鈴鹿にかかつたらしい。機はドルニエメールクルであり 新野君が操縦する、それへおなじみの村山君や僕が乗つてるのだ。危ないなどといふ感じは毛頭もたないが、どうも時刻が次第におくれさうだ。といふのは機首を或は左に或は右に曲げるのを 始め一二回は覚えてるたが、どうも逆行か旋回かとかくぐる／＼廻つてる。いつのまにか方角も見當も付かなくなつてしまふ。

雨雲の中でぐる／＼めぐり廻つてるうちに、機は又ある川に沿うて下つてゆく、その川がどうも見覚えがある。ある筈である。今までさかのほつて來た木津川である。

七、近江八景一と目

右側に見た奈良の街が左側に見え、生駒の山が前に横つてる時はこれで大阪逆戻り

などは全くやり切れないと悲鳴をあけたくなつたが、機首は右に右にと旋回して此度は宇治川に沿うて遡つてゆく、石山寺から膳所の橋を真下に見る。比叡の山なみは雲低く垂れて見えねど、草津八幡から安土彦根の沿道に、百足のやうにのろくはしつてる汽車をいくつか追ひ越して、伊吹嶺の山脚を左に關が原に突きぬけた時は全くやれやれと一息ついた。

これが船であつて見ればそう手軽に引きかへされない。飛行機ならこそひらりく身をかはすのである。鈴鹿越えポコペンとある。宜しいとばかり見るく大和國原に引返す、この進退軽快自由自在といふ處に飛行機の特徴がある。身軽なること自動車以上に、しかも軌道も道路もいらぬ。しかもより快速力で前後左右に身をかはす、なるほど時間は一時間ほど後れた、立川のお客さまがたには濟まなかつたが、我等は近江八景一の目見物といふ大景物にありついたのであつた。

これからは美濃の國原、あの平原を處狭く流れてゐる木曾川、長良川、名古屋の街

から蒲郡、濱名湖から天龍大井宇都谷を越えて、静岡を真下に清見瀉にいづれば、三保の松原も真上からでは海中に細長く出てるはずが、練馬大根以上に蕪のような形をして横つてる。富士が嶺は見えないが裾野はさすがに大きい。大阪を相前後して立つたコメツト機が視界にはいる、相並んで窓から手巾を振りながらかたみに聲をからして萬歳を叫んでる。箱根を越えた、越えたと思ふたら大山が眼の下にある。あれは馬入川と見る間に多摩川の銀の帯が光つてる、機は立川に着すべくもう機首は下に向つてゐる。我等一行は鈴鹿山まで往復で一時間ばかり時はのびたが、大阪壽司と一緒に無事立川に着陸した。機上にある事四時間に近かつたが心持は三十分位に過ぎないやうな氣がした。

八、揺れる揺れぬ、酔ふ酔はぬ

飛行機に酔ふ酔はぬといふ、船に酔ふ、自動車に酔ふ、電車に酔ふ人もある世の中

に、飛行機も酔ひたいとおもへば酔へる。酔はないとはいはぬ、しかし私は船にもど
うかといへば強い方であるだけに、飛行機には全く酔はない。

船とくらべたら飛行機の方が酔はないといふのは、船にはローリングがあるピッチ
ングがある、この前後左右動は飛行機には無いといふてよろしい、あの速力で空中を
突き切つてゆく、おまけに船とちがつて至つて小さい、あの小さい飛行機が小さいな
りに前後左右にゆられてはたまつたものでない。全くゆれない。旋回する時にかしぐ
事はある。それは旋回の時にかぎられ、又左右動ではないたゞかしぐ、一時かしぐと
いふだけである。

飛行機は船と比較するよりも自動車と比較するのがよろしい。自動車に上下動があ
る。悪道路を以て天下に名聲をはせてる日本では、いたる處でこぼこ道で上下動する
速力を加減しないとどしんと反動で頭を車蓋にぶちつける、時には上下左右に猛烈
にかしぐ、さうなると飛行機では大空は一切平等無差別である。日本の大空は比較的

氣流がよくないとはいはれるが、もとより道路の比ではない。全速力で飛ばしてると
時に機が持上る、又下がる、空氣の疎密により上下動はたしかにある。しかし車室内
にぶら下けてある紐を手にするまでに至つた事はない、籐椅子にもたれたまゝで何ん
の不安定も感じない。又その所謂エヤー・ポケットに入る上下動とても算へるほどし
かない。又ほんの瞬間の出來事で船の揺れのやうに繼續的のものではない。

九、超高速短歌

僕は試みに機上の客となつて、絶えず萬年筆をとつて見たが、電車や汽車よりもよ
ほど書きよい、問題にならない。僕の短歌はとかく難産で、中々想がまとまりにくく
調をなしがたい、しかしかかる時にこそと生駒の山を越える頃から思ひうかぶまゝに
三十一文字をつないで見た。即興をそのまゝかきつけては右から左へ一枚又一枚と村
山君に連發の短歌を手渡した。全く應接に違あらざらしむとでも誇張してよろしい。

僕としては一時間足らずに此度の機上の時の如く濫發した事は始めてであつた。その翌朝に機上即興として東京朝日紙上に披露したものは、その中から撰り残された十首である、また飛行機上の即興といふ點を買つて貰つて、わざと筆を入れずそのまゝにこゝにのせる。以て飛行機のイージイな旅のあかしたもならう、たゞ文句をいへば自動車の東京立川間が遠すぎる。飛行機の東京大阪間が近すぎる。

生駒山の眞空わたれば峽にそふ

棚田つゞきて池ところく

生駒越ゆれば大和國原眼の下に

霞むと見えてはや過ぎにけり

東大寺を見てあるうちに心あての

笠置の山ははやあとにあり

我乗れる飛行機の影は山を越え

谷を渡りて追ひ來るなり

この朝風や、強し稻田をわたる

風のうごきの明らかに見ゆ

吹き降りの大空にして薄日さし

我眼の下に虹立ちにけり

鈴鹿より引かへしたりとおほえたり

若草山見ゆ東大寺見ゆ

ひらりと體をかはして木津とおもへば

はや宇治川なり琵琶湖にいでたり

石山膳所見るく八幡安土をこえ

竹生島のしづもれるが見ゆ

雲低く垂れたるまゝに伊吹嶺の

麓や、見え雨のあし早し

きらめく霞のたえまに宇都の谷の

谷のはざまのたかむらは黄ばむ

(昭四、正月號文藝春秋)

雅邦と春草と大觀

一、雅邦の龍虎

龍 虎 圖	橋 本 雅 邦	松 林 遊 鹿 圖	瀧 和 亭
菊 花 鷄 圖	野 口 幽 谷	司 馬 溫 公 獨 樂 圖	川 端 玉 章
蒙 古 襲 來 圖	松 本 楓 湖	青 綠 山 水 圖	野 口 小 蘋
耶 馬 溪 圖	今 尾 景 年	群 仙 圖	鈴 木 松 年
蘆 雁 圖	望 月 玉 泉	江 の 島 圖	森 川 會 文

これらの筆者と畫題は何れも六曲屏風一雙で、我國美術界の進展を促すため、第四回勸業博覽會の開催を機とし、岩崎家において東西兩京を通じ當時第一流の大家に揮毫を依頼したもので、明治二十八年の春全部を同博覽會の美術館に陳列せられた。

この計畫は誠に有意義なるものであつて、第一流作家も互ひに競技の意氣込みを以

て異常の緊張と努力によりその妙手を揮ひ、江湖もまた畫壇稀に見る壯觀に對し大なるセンセーションを起したことは、また記憶に新なるところである。

今夏明治大正名作展の催しあるや、これ等作品は凡て岩崎家に所藏せられてあるがゆゑに、評議員會はそのうちより更に五、六の名作を精選したが、中にも雅邦の『龍虎』に至りては、この十雙の作品中よりとはいはず、また雅邦の作品中よりとはいはず、今次の名作展を機とし、特に觀賞を擅にしたき名作として衆口之が推薦に一致せるものであつた。

現に名作展開けてより、雅邦の『龍虎』は芳崖の『觀音』と共に衆評の的となつたもので、その構想到、筆致に、着色に、獨創的新味を以て先人未到の境地に達してゐる。龍虎といへば古來水墨と極つてゐる。應舉、岸駒など稀に着色のものもあるさうだが、到底卑近にして見劣りがするといふ。まことやあの尤も困難なる濃彩で極めて謹嚴にまた極めて放膽に、あの創造的の新生面を何等凝滯するところなく、しかも一點一

劃を苟くもせず、その筆致の雄大と構想の統一とは、誠に靈化したる絶品として涙ぐましく敬虔の念を禁じあはざらしめる。

ところがこの時の十人の大家には、岩崎家は各金五百金の包み金であつたといふ。金の相場も變つて來たが、その時雅邦は雅邦でかうした大金を受くべきでないと固辭したといふ逸話も残つてゐる。しかし更に滑稽なことは、審査總長九鬼隆一男の下に十雙の屏風揮毫者なども審査員に任命されてゐたが、審査の結果屏風の畫は全部妙技二等賞を受けることゝなつた。が龍虎一雙だけはこれに洩れた。それは妙技一等賞になつたのではない落伍したのだ。雅邦の『龍虎』は從來見慣れてゐた判におしたやうな傳統的な構想手法を破つてゐる。先づ畫界から見えて異端者である。その新しき獨創の苦心努力に對し涙ぐましく讚嘆するかはりに、奇怪千萬なりと驚異の眼を見張り惡罵非難を降らしたのだ。そこで『龍虎』には授賞ができなくて、雅邦が龍虎と共に別に出品した十六羅漢に妙技二等ではない一等賞をおくつた。

時勢の變、今昔の感といふも愚かである。が當時只獨り大阪朝日新聞社は論説欄に於て

審査員が最高賞を「龍虎」の屏風に擬せずして、むしろ平凡作と見るべき羅漢作に與へたは愚の骨頂である。龍虎圖の落第したのではない、審査員が龍虎圖に落第したのである。龍虎圖の價値は岩崎氏の擁する富の全部より大なり。

といふ意味の意見を公にした。それは故高橋健三、天野皎諸氏の意見によるものであつたといふ。何れにしても雅邦は大朝紙上で漸く伯樂に出遇つたのだから、まことに無量の感概なきあたはずである。(この一項については木鳥櫻谷氏に負ふところが多い——海南)

二、春草の落葉

明治大正名作展で嘆美的となつたものに別に「落葉」がある。その作品の妙とそ

の筆者の短命なりしことは、一層に觀賞家の愛惜をそゝつたやうである。

名作展の評議員會席上でも、食卓の坐談に、ペランダーの立話に、故人春草のうはさの上らぬ時が無かつた。明治三十年第一回の繪畫共進會に出品された、あの「水鏡」の大幅を筆にするときも、あの水邊のあぢさるの花は庭前の二枝三枝をとりて花瓶にさし、わき眼に見つつ極めて自在に實物寫生をしたといはれ、あの「落葉」の時にはもう視力が衰へて眼が霞み、いつも畫面に一尺四方位のところをぼうとして見えない。それをカンであれだけ繊細な描寫をしこなし、淡々たる色調を以てあの大畫面に少しの破綻を見いださなかつたと傳へられてる。春草ばかりは實に天才であつた。いかにも惜い人を若死させた。惜いことであるといふ聲は至るところから聞かされた。

實際「水鏡」といひ「黒猫」といひ、そこに春草の天才の閃きが見える。ことに「落葉」は、たしか二十本ほどの雜木林の幹ばかり見せて、墨と赭色と濃淡相交はれる單調の中に、一本の若杉と小鳥のとまつてるくぬぎの枝を横ざまにのばして、そこに吾

吾平素眼になれ切つてる雑木林の一断面を、極めて自然にうけ入れて閑寂なる情趣が紙面にみちくとし、無限の哀愁がその紙背にまでにじみ出てる。

畫伯の多くは今更ながらにこの畫面の前に立つて推稱の聲を絶たぬ。ある畫伯は自分にかうした一双を忍がき得たならばもうそれで死んでもよいとまで嘆美してゐた。

筆者の友人はこの『落葉』がはじめ文展に陳列された時に、いかにもいゝ、いかにも旨い、どうか手に入れたと思ふたが、二百四十圓といふ賣價が高すぎる、いや當時の懐合には高すぎる。それも今日なら二千四百圓が二萬四千圓でもすぐ手を出ししようが、當時春草の名もさう賣れてはゐない、どうも二百四十圓までふんばつする勇氣がない、なんでも五回とか六回とか當時上野へ出かけては、この『落葉』の前に立ちつくしたものださうだ。

ところで今度名作展に出品されて評判は日ましに高い、たしかに日本畫壇に傳はるべき不朽の名作である、立派な國寶であるとまで激稱せられる、なんだか一旦自分が

嫁に貰はうとしたいひなづけの美人をとり遁したやうな氣がして、今更残念な事をした、しまつたと悔やみながら、昔を忍びて既によその花になつてる『落葉』にあこがれて、名作展へこれで四度とか五度とか出かけて來てますといふ。

ところで此『落葉』の陳列されたのが明治四十二年の第三回文展であつて、今から漸く十八年前の話である。當時『落葉』が出品の鑑査を受くべく運び入れられたときに、ある三人の鑑査員は六十一點といふ點をつけた、六十點以下は落第である、此『落葉』は例の型にはまつた傳統的の手法からかけはなれて、雑木林の幹ばかりならべてある。こんな繪は落第だが、まあおなさけで六十點にたつた一點を加へて六十一點、まづ假及第といふのでやうく合格したのだから面白いぢやないか、その時の審査員でまだ存生の人も一人ゐますが、さぞ今昔の感にたへぬでせう、とある畫伯はしみじみと筆者に懷舊談を洩してゐた。

筆者は繪畫の方は暗いのでこれに引合に出してくる面白いエピソードも持たない

が、歌人の方などでも大愚良寛は相馬御風君の筆によりて近時名前をあけた。大隈言道に至つては全く知られてなかつたのが、佐佐木信綱博士により世間へ掘り出された、古來随分かうした例は少くはない。雅邦の『龍虎』が入賞しなかつた、春草の『落葉』が危なく出品すら出来なかつた、しかしその作品の眞價はあまり長い歳月をまたずに發揮せられた、今昔の感といつてもいろいろある、がその歳月の比較的短いだけに、感ますます深しといふべきであらう。

三、大観の瀟湘八景

昔、昔その昔、宋迪とかいふ人がはじめて瀟湘八景をかいたのだといふ。それから和漢ともにその技巧にはそれ／＼特色もあつたらう、優劣もあつたらうが、いづれにしても型にはまつた瀟湘八景は時代を追うて／＼と出来上つてゐる。ところが横山大観は支那へいつた、なんでも天氣都合で親しく瀟湘の地は踏まなかつたさうだが、

長江一帯の風景を觀賞してこれを消化しつくし、十五年前今までのそれと全く構想を新にした八景をゑがいた。もとよりそこには飄逸に失するとか、大観そのもの、個性が出すぎるとか、さまざまの世評もあつたらしい。洞庭の秋月におけるキュツ／＼と直角以上に曲つたやうな枝振り、平沙の落雁における牛の脊の上の牧童のかたち、漁村の返照における漁夫のまどるなり子供をつれた女なり、たゞに畫といはず落款に至るまで、いかにも飄逸であり個性がよく出てる、そこに大観のありふれた積年の舊套を脱却した新しさがあつた。その特色があればこそ傑作として當時の美術界を聳動もし、また今夏の明治大正名作展にも陳列されて江湖の觀賞するところとなつたのである。

ところが大観はあの畫の名作展に陳列さるゝをあまりに喜ばなかつた。恐らく凡ての畫家が己れの舊作を見てあきたらず思ふが如く、彼もこの八景に不満を感じたらしい。しかも大多数の作家は只不満を感じただけに止まるであらうが、還曆にちかき大

観は今秋の院展ゐんでんに更に同じ題材を筆にした。さきの絹本の着色長上物に代ふるに水墨の紙本横物を以てし、全然形式手法ぜんぜんけいししゅはふを新にして縦横無碍じゆんけいむがいの靈腕れいわんを揮つた。大観の鍛きたへあけた手法しゅはふはさきに『生々流轉』によりて自在じざいに現はされたが、今や一層圓熟せる筆致ちを以てこの八幅に入神じふじんの技をそゞぎ込んだ。われら同人どうじんはどれが一番氣に入つたらうと見くらべて、結局はみなとりんゝに氣に入つた。しかも八景を一目に見て全體ぜんたいとしてのバランスがまたよくとれてる。渾然こんぜんたる筆致の極、構想の妙、正に崇高の域に達してゐる。

明治大正の藝術に横山大觀よこやまたいくわんあり、維新以後聖代ゐしんいごせいだいに偉人として十指を折れば大観は正にその一にゐる。自重加餐じちようかさんますく、斯道に精進してほしい。

四、美 術 館

大観の『瀟湘八景』を見てある強い刺けきを感じた。たゞの一幅ではない八景もの

に對し、斯界しがいの重寄じゆうきを以て任ずるものが更にその筆を新にする、その稜々たる雄心りゆうしんその撓なみなき精進の氣分に感激かんきを催し、ひいてあの名作展めいさくてんがひとり社會に對するのみならず、畫家その人達びとたちへもなんらかの感激かんきを與へたといふやうなことも連想されてくる。もしこゝに歐米諸國おうべいしよこくの如く常設の美術館がある、そして『龍虎』も『落葉』も、さうした作品さくひんがいつも觀賞に供せられてゐたら、どれだけ日本の美術界が進展しんてんするであらう、どれだけ日本國民の藝術的試練けいじゆつてきしれんが訓育されるであらう。

若松わかまつの佐藤慶太郎君の寄附によりてあの美術館びじゆつくわんが建てられてゐたことが、まだしもあゝした催しを試み得たるせめてもの心やりである。又原富太郎君またはらとみ ちらうくんのやうな畫界に對する理解りかいを持つ人のあることも忘れられぬが、しかしこんなこと位ではまだ何ともしやうがない。日本の國は美術びじゆつの國だといふので、よく外人などに意張いばつてる。そして奈良や京都の古美術こびじゆつを見せて得意になつてる。古美術の賣り立てとなれば、一品ひんに何萬、何十萬圓と惜しけもなく金を出す……それは藝術けいじゆつの心持ちこころもちからかソロバンの上か

之れはいづれにてもよろしい……しかし日本の美術品は一面には散佚、一面には贋作、かくの如くにして古きものは次第に失せてゆく。しかも明治大正昭和の聖代に於ける新興美術の發展といふことには全く無關心である。

世間も無關心であるから、世間を反映する新聞も只社會面の記事や學藝欄の記事として取り扱はれるだけで、新聞が國民の思潮問題として藝術を論説欄で批判し論議することは日本では一寸六つかしい。やれ外國人は物質的だなどと一とかど非物質的の態度をとる日本國民に「印度を失ふも沙翁あるを誇りとす」といふやうな英國國民の氣分が果して動いてゐるだらうか。

大觀からつい、春草、雅邦と名作展當時の思ひ出を連想し、更に日清戦役の當時大阪朝日の論説欄に雅邦の「龍虎」が批判せられたる昔をしのび、ひとり美術の常設館といはず、今少し藝術と日本國民の思想の淨化といふことにつき社會の注意を引いて見たく、こんなものを書きつけて見た。(二八八、八)

正雲寺の一丈塚

男女老幼の別こそあれ、同じ人間であるからは、其の社會生活のいづこにか、一石を投ずれば萬波これに伴ふに不思議はない。

新聞の社會面を見てをれば、いつもかうした波が次から次へとおこり次から次へと消えてゆく。そこには猫入らずの波がある。若い燕の波がある。家族心中の波がある、學校ストライキの波がある。三角關係の波がある。松島事件の波がある。芥川龍之介が死ぬ、きつと餘波が起るよというてると、果してその言の如しである。

だから、社會の出來事に對する處理方、ことには新聞などの記事の取扱方如何により、さゞなみにもなれば千頃の怒濤にもなる。

よく新聞で、活動寫真から刺激をうけて、凶事を敢てした記事を散見する事がある。それはいふまでもなく婦人や子供……若い者に多い。如何にもさう有りさうな事であ

る。仙臺の伊藤電狸翁夜話をよむと、

ある町人は絹布類を着る事が法度であるのに、絹の夏羽織に蠟を塗り、麻羽織の如く見せかけ着用してゐたので「奴」に處せられ……奴隸となり武家にあづけられる……又其町の檢斷……目付の下につき目明しの上役ともいふべきもの……は取締不行届といふので「戸結ひ」……士ならば閉門、町人ならば戸矢來を結ふ……に處せられたとか。ある町人が一個八文の柚子を九文に賣つたのが不都合とあつて芭蕉の辻で「晒し者」になつた。

など徳川氏時代の法度又之を處斷する制裁につきいろ／＼おもしろい挿話を知る事を得たが、その中にも正雲寺の一丈塚といふ話がいかにもかはつてゐるのでこゝに紹介する事にした。

今から百四五十年前のことである、七北田の刑場でさる罪人が火あぶりの刑に處せられた。その時分は見物が自由であつたので大變な群集が山をなしてゐる。荒町か

ら十歳前後の子供が十人ばかり見物の中に交つてゐたが、歸つてから火あぶりの眞似事をはじめた。それが眞似事から本物となつて、たうとう罪人の貧乏くちをひかされた子供は焼き殺された。これから話が深刻になつてくる、といふのは他の子供達の親々はいかにも申譯が無い事をしたといふので、揃ひも揃うて自分達の子供をそれ／＼殺して詫をした。子供達の親々はこれも何かの因縁事であらうといふのでそれ／＼菩提寺はちがつてゐたが、焼き殺された子の菩提寺である新寺小路正雲寺に一丈餘の塚を建て、その上に子供の數だけの地藏尊を建て、ねんごろに葬つたとの事である。

話はたゞこれだけである。

今日の社會意識から批判せよといふのでもなんでもない。さうか、そんな事もあつたのかと軽く昔話として聞き流がしてもよい。なんだか現代の思潮にある暗示を與へてるよと、仔細らしく取扱うて餅についてもよい、僕は他日仙臺へいつたら正雲寺を

おとづれ、もしその地藏尊ぢざうそんがまだむかし通りならんでるたら、一つく頭たまを撫なでて見たいと思おもうてるる。(二、九、十)

石 見 の や

一、孤獨の樂み

一月の二十四日大阪と神戸かうべで第一聲をあけた普選激勵演說會ふせんげきれいえんぜつくわいは、至るところ人氣湧わくが如く定刻前ていこくぜんから満員で、屋外演說おくわいえんぜつや第二第三會場の延長えんじやうを餘儀よぎなくする盛況せいかうをつづけた。

名古屋、京都のあとが廣島ひろしま、門司、熊本、福岡の各市で、尾崎聖堂いまいのかかう、今井嘉幸いまゐのかかう、賀川豊彦がけふゆひこの諸氏しよしは身邊しよんますますく多忙たまいとなり、一行は末廣重雄すゑひろしげを、高原蟹堂かたはらかにやう、等數人とうすうじんに過ぎなくなつたが、時節柄じせつがらたいへん大變たいへんな人氣じんきをそゝり立て、連日の長講ちやうかうでさすがの蟹堂かにやうも坐談ざだんでは聲こゑが全くつぶれてしまつた。

各地かくちから講演の注文くわんもんが殺到せつたうする、止むなくその中から末廣、高原の一隊いったいは岡山おかやまに聖堂せいだうと會あし更に高松たかまつに渡る。僕は分れて山陰の松江に米田實博士まいだみのりはかせと壇上だんじやうに立つ事となる。

かうした氣忙しい旅の空には紀行もない、況んや短歌をやである、ところが福岡の演説を片付けて下關の山陽ホテルに引上げたのが夜の十二時に近かつた。あくる朝は七時半の汽車で十時ごろ小郡乗り換へ、大社行の汽車でたごと、石見の國を横斷して松江をすぎたのが夕の六時半、松崎驛に下車東郷温泉に投じた時は十時に近かつた。この十四時間ほどの汽車の旅が、たゞの一人となつたのだから、そこに孤獨の楽しみが油然と湧いてきた。

人間も止むを得ず孤獨になる、極端なは刑務所の獨房へでも押し込まれるととてもつらい、孤獨を強制されることは人間が社交動物である以上堪へられない。強制されなくとも、事實世間から忘れられた孤獨生活もかなりつらい事は、浪人生活をする人のしみぐ味ふ境涯である。今僕は忙しく生活の中から全く一日を自由に放たれたのである。尤も人によると話相手をほしがる隨行者を便利がる。が、僕はそんな事するのが氣づつない。たゞ獨り旅ののびくとした心持ち、この尊さに新聞人として深い深い執着がある。

二、石州津和野

いや飛んだ脱線である。今大社線は山口をはなれていくつかトンネルをぬけると、長門峽驛に出る。これから長門と石見の國境を越え、汽車は山の裾を縫ひく谷間に降る。そこには繪にあるやうな町が谷の底に浮かんで見える。

石州津和野、龜井殿の御城下として古くから聞えてる。ことに維新には西周翁を出した。その門から森鷗外を出した、島村抱月もまたこの地の出である。昭和の御代に生れ合して一生知らずすぎさうに思ふた、この交通不便な山の奥の津和野を冬の真中、車窓によりながら吹きすさぶ吹雪をながめつゝ、汽車にして走りすぎやうといふ、ありがたいことである。

山の峽に晝にあるやうな町のあり

わが汽車いまし津和野にくだる

高津川の谿谷に沿うて益田に下る、こゝに歌聖柿本人麿の終焉の地として柿本神社がある、一體なら下車して参拜すべきだが時間の都合もありそれもかなはぬ。

石見のや高角山は見えねども

むら立てり見ゆアンテナの竿

としやれのめして通りすぎる。これから石見の海添ひの汽車ががたごと、約六時間、長々し晝を獨りかもねんで、さすがに飽きくもするうとくもする。

石見のや海添の汽車のがたごと、

吹雪のうち一日過ぎにし

石見の海うみぞひ長し石見のや

石見のやとて寝入りけるかも

三、お客とボーイの根氣くらべ

はじめの小郡大社線だから、氣を引き立て、寝入らぬやうく無理にきん張をし
てる。ありがたい事には、十分十五分とたぬ内に汽車はとまる、またうごく。普選
前でもあらう、半分仕切の二等室に折々客の乗り降りがある。この御客さまたちは御
多分にもれず、出る時入る時はせう事なしに戸を開けるが、あとはしめる事を忘れた
がる。開け放しの戸口から雪風がさつと吹き込むから、眼もさめやうぢやないか。

そこへこれも御多分にもれず、お客さま達は新聞紙はまだよろしい。煙草の吹がら
蜜柑の皮、辨當のあきながら曰く何曰く何、そこら中に丹念になげ散らす、列車ボーイ
は又一々青い粉かなにかをふりまいて掃除にかゝる。お客の方も負けん氣になつてこ
れでもかまたま直ぐそのあとへまき散らす。また掃除にくる。またまき散らす、また
掃除する……書くだけで草臥れることほど左様に、お客とボーイの白熱的掃除戦が根
氣よく續行されてゆく。このボーイが一々入念に足の下へ箒を入れてくれるので又其

度に眼がさまされる。

四、驛名と旅客難

石州濱田、いづれも親しい友どちらである俵孫一、島田俊雄兩君の一騎打で名だゝる濱田、その少し手前に三保三隅といふ驛がある、その驛の手前の邊から五六人の鐵道の連中が乗込む。二人ほどは手拍子とつて謠本を前にし小聲でうなつてる。一人はどこからか出張して來たらしい人に、いろくくと沿道のストーリーを話してる。

どうもこのステーションの選定は大もめ、おまけに名前が雙方大競争となりました、とうく三保と三隅を一處に三保三隅となりました……といふ事である。これが三保や三隅でよかつた、西宮東口なんていふ長い名前がつながられては大變だ。

三保三隅から驛名が連想されるが、石見の國の地名もかなりやゝこしい。津和野のとなり日原これはひばらでなくてにつばらとよむ。江津をえづとよまずにごうづと

讀むと等しく重箱よみである。さうかと思ふと江南といふ驛がある、えなみかとおもふとこうなんと讀んでる。そりや一の谷嫩軍記にもこうなんの一枝なんとかとあつたやうに思ふ。こうなんと讀めんことはないが、江南とあればまづえなみとよみたがる、之れをどうしてもこうなんとよみたければ甲南とでも字をかへるがよい、この前徳島縣を旅した時に、田中といふ驛名が、でんちゆうと發音されてるので少からず驚かされた。恐らく、徳川氏時代の漢學ばやりに、腐儒のいたづらからかうした讀み方をはじめたのではなからうか。

波子のはしもはしといふ土名に漢學者が、海岸であるからよろしく波子の二字を充つべしといふしやれであつたかもしれぬ。温泉津はゆのつとよむ、それなら湯の津と記してよい。わざく湯といふに温泉とは手数がかゝり過ぎる。また奇抜なは下府驛である、諸君之を何んとよむ、かふか、しもふか、けふか、ちがふく、これはしもこふとよむ。恐らく下國府のしもこくふが音便でしもこふとつまる。一々下國府と書

くのがめんだうとあつて、國の字をオミットしたのだらう。これもまた徳島縣とくしまけんに府中といふ驛があつて、これが驚くなかれこふとよむ。府中乃ち國府のあるところといふのだから、洋燈をランプとよみ莫大小をメリヤスとよむに異ならず。かうなるともう判じものに屬してくるので、到底たうていわれれ凡人のうかゞひ知るべき所にあらず。

國字の改善かいぜん、古い問題である。地租委讓ちそゐんちやうや義務教育費國庫負擔などよりも、文字の改善がどれだけ利益になるか分らない。教程けうじょうが簡單かんたんになつて教育費けういくひが減ずる、それだけ早く學校がくかうを出て世の中でより多く働ける。がかうした問題は、今の代議士だいきし諸君しよくんや選舉する多くの人々には何分にも問題もんだいが大きすぎる。

雪はふり止まぬ。廣島ひろしまからは北を望んで三次の中村憲吉なかむらけんきちく君をしのんだが今は南に仰ぐ事となつた、君住める山郷はさぞや吹雪ふぶきにとざされてるだらう。君は雪を見ながら杯を手にしてただ獨り歌をよんでるだらうか、それとも地方ちほうの有力者いりりよくしやとして時節柄普選の渦に巻き込まれて額ひたいに筋すぢをよせてるだらうか。

とりとめもないことをくさくうつらく思ひうかべてると今市に着いた。これで石見いしゐのやの分はおしまひになる。(昭、三、二月週刊朝日)

山陰の温泉場

山陽から九州の普選激勵會を打つて廻つてると山陰の松江でもやつてくれといふ、ゴルフをやりすぎた上にリヨウマチの氣味で右腕の關節が痛い、山陰では大社も松江も美保の關も會遊の地である、どこか温泉場で一と息つきたいと思ふ。

城の崎では通り過ぎる上にこの冬空に外湯は風引きのもとである、内湯で氣の利いたところが松江、米子邊までの沿道にないものかとしらべて見る、温泉場の名前は三つ四つ分つたが、内湯かどうか、設備がどうか分らない、鳥取の縣内で三朝といふのが、近ごろ評判になつてゐるが、支線には入つてまた自動車で二三里あるといふ、東郷はと聞けばステーションに近いが、なんといふステーションか分らない、いろいろと詮議の末が松崎驛下車とわかる。

福岡の演説をすまして下關の山陽ホテルについたのが夜の十二時、あくる朝七時半

の上りに乗つて十時小郡にのりかへ、あれからがたごと、長門峽から石州の津和野でひる辨當、これから長々と石見の海岸に沿つて松江をすぎるころははや夕の六時をすぎ、夕飯も食はずに綿を散らす如き雪を窓外に見て松崎についたのが夜の九時、十時間汽車をぶつ通して執念深く逐ひつめてきた東郷の温泉は、松崎驛から驚くなかつたの六町、吹雪の中を自動車に乗つたと思ふたらずぐおりの。

東郷湖又鶴の海といふ、周廻三里にあまる湖水のたゞ中に突きでた湯島のとつばなに養生館といふ温泉旅館がある。晴好雨奇の勝、曉煙暮嵐の景、四時の風光に富んでゐる、ことに湖水の鯉に鰻が名物とあるが、あまさぎが一等旨い、霞ヶ浦のわかさぎに似て大なるもの。

ところで選舉記事で紙面の狭い中へものすきな話だがつい筆を飛ばすことになつたのは、山陰線の温泉は城の崎の外は揃ひも揃うて驛名と温泉の名とちがふことである、そりや違ふから違ふのだといふだらうが、違つてゐても違はせたくないのである。

大和の吉野鐵道の沿線に人口三萬に近い高取といふ舊城下がある、しかしその驛名は高取でなくて二里も奥の壺阪としてある、壺阪へ御客を引けば高取も濕ほふのである、一昨年の夏東北線花卷驛から二里奥へ臺温泉の湯をひき入れて新に温泉場が經營された、開場前七日に案内された僕はこの温泉の名は花卷とせよ臺温泉など、いうても名が賣れてない、花卷の方がうれてゐる、それに花卷より二里電車の便ありと廣告する毎に行數が餘計に入る、お客の氣がつきにくい、付いても花卷から又乗り換かとおつくうがる、宜しく花卷とすべしといふたが、經營者は繪葉書から案内書から凡て臺温泉とあつたのを皆反古にして新規に花卷と改稱し開業したのが今の花卷温泉である。

一寸鐵道案内の旅館廣告を見ても濱坂驛から三十分にして湯村温泉、岩美驛から十分にして岩井温泉、松崎驛から六分にして東郷温泉がある、大社參詣の觀光客、偶沿道の驛に停車してゐるとき、何々温泉これより十町といふ立札を見て、それおりろお

りて見よといふて見ても開けてる風呂敷やかばんを片付けるひまもない。

現にあくる朝米田博士が駈けつけて來た、昨夜はといふと鳥取にと答へるそれなら眼と鼻の間だつたのといふと、無論あなたの宿へと思ふたが、京都驛で東郷温泉へと切符を求めてもさうした驛がありませんどの驛から出かけてよいか分らないので仕方なく鳥取に泊りましてなと答へる全くお客のより付のわるいやうにしてある處へ寄り付かうとするには骨が折れる。

今日は雪の東郷湖を賞して一日を湖心におくらんか、寒けれど雪見にころぶところまで倉吉線に入りて三朝の温泉に出かけやうか、あすは米田博士と松江の演説をすましたら、松江温泉といふても又隣驛の湯町の温泉といふてもよい、玉造温泉に泊らうか、それとも米子温泉といふてもよい皆生温泉……これもなるべく御客をまごつかせるやうかいけとよむ……に泊らうか今思案最中である。

なに、しても此邊の温泉はさあお出で下さいと人の袖を引いてはくれないで、皆恥かしさうに自分の袖で顔をかくして俯むいてゐるのだから、出かける方も中々並一と通りの苦勞ではない。(三、二、一、東郷温泉にて大阪朝日山陰版)

海を渡りて野をわたりて

(牧野英一博士の近著を読む)

學者には、馬車馬式におのれが専攻の畠に首を突つ込んで脇目もふらない、まあ大阪の船場あたりの門構へのやうに奥行ばかりで、鎗の雪隠といふやうな式もあれば、また己れの間口ばかりか向ふ三軒兩隣まで、悪口をいへば浮氣、よくいへば馬鹿に手廣く商ふ流儀もある。

刑法學者として折紙のついてる東京帝大の牧野英一博士は、どうかといへば手廣く商うてる方で、しかも奥行が浅いといふわけではない。考證該博というてよいか談論縦横というてよいか、壇上において紙上において、筆舌の雄として長く聲名を馳せてゐる。

君は飛驒高山の出で、令弟良三君と共に、子供の時から家庭で短歌を詠まされたと

聞いてゐる。そのせいばかりでも無からうが、君の短歌は苦吟遅吟でない、咳唾珠となつて樂々と連發される。この藝術氣分はどれだけ牧野君の筆舌の持味を豊かにしてゐるか、如何に君の學者的氣分に人間味を彩つてゐるか。地金が刑法だけに、短歌のいぶしは、そゝろに世人の鑑賞をそゝるものがある。

その牧野君が、前回の海外漫遊には「小蓋集」をのこし、此度の旅行には、

旅に出づわれ等たゞそのわたり鳥

海をわたる如野をわたる如

といふ歌を振り出しに、

ドナウ河むかふは最早隣國の

廣野おしなべたつかすみかな

といふ歌を結びにして「海を渡りて野をわたりて」と、夫人同伴だけに長々しい仲のよい表題で、四百ページの冊子を公けにした。「小蓋集」の短歌集に對し、これは短歌

と紀行文がかたみにいゝどられてある。

殊に本書の特色は、法律學に從事する者が法律學のために旅したとはいひながら、そこは牧野君である、君一流の鋭い觀察が豊かな詞藻によりて面白くをかくし表現されてゐることゝ、そのへめぐつたところが、多くは歐米外遊連の御成街道から脇に外れてゐることである。

君は先づシンガポールから赤道を南してジャバに入り、ジョクジャの王宮に、ボロボドールの古寺に、トサリの山の上に、バイデンゾルグの植物園に、遊子綿々たる情緒を筆のまに／＼唄うてゐる。次で印度に釋迦のあとを吊ひ、エジプトより更に東してエルサレムに基督のむかしを偲んでゐる。

ヒマラヤ行、キンチンジャンガの靈峰、さてはアソカの塔にタジ・マハルに、グワリオルの城に、象の脊に、法の人が同じ法だが刑法の人が佛法のあとを訪ひ、そこにカツダール主義を批判し、ガンディーに代つて全印度國民大會の議長となつたナイデ

ウー夫人を紹介してゐる。

聖都エルサレムに入りてはベクニヤに、ナザレに、死海に、ヨルダンの川に、ガラヤの湖に、慈悲の國より愛の郷に入れる著者は、さらにエジプトに西してナイルをさかのほり、次でボスフォール海峡よりトルコの古都を訪ひ、次第に馴染の多いイタリアから佛に英に、最後には

朝たちて百里の青葉わが船を

むかへてはおくるラインの村々

と歌ふた。そのラインの河をさかのほりてバーデン・バーデンの、あの森の都温泉の都に足をとめてゐる。「先づ湯にひたりて」の章では、著者はドイツの憲法を主題として縦横にメスを振ひ、

「わたくしは、東ローマの舊都から文藝復興の跡をたどりつゝヨーロッパを旅して見たわけです。否、人權發達の跡を、まづジャワに求めてわたくしの旅をはじめたわ

けでした。インドの古き、エジプトのはるかなる、これらは別に致しませう。ギリシャの昔、ローマのそのかみも、又取り出でては、ことさらに申し立てますまい。マグナ・カルタの故國を見、人權宣言のその地を過ぎて、今こゝに、世界の最も新しい憲法の國に來たわけです。」

と記してある。

こゝに君の歌を一々紹介したり、君の紀行文につき一々批判するなどは、餘計なことであり大きな御世話である。たゞ藝術と法律とをあざなへる牧野博士の海外遊草「海を渡りて野をわたりて」が、公けにされたと御披露するだけで澤山である。

(昭三、一月東京朝日)

平福百穂君の『寒竹』

畫は無聲の詩といひ詩は有聲の畫といふ。

畫伯平福百穂は誰も知つてゐる、君が傑作豫讓、七面鳥を知るものは所謂外丹を借りて内象を徴すといふ、君の歌集寒竹によりて君の彩筆のよつて來たるところを知らねばならぬ。

歌集寒竹は明治三十九年の處女作

甲斐が峰に星はかたむき天の原

かへり見すれば夜は明けむとす

より昭和二年の

こゝにしておもひは清しいたゞきの

笹原なびけ風わたるなり

まで六百二十五首ををさめてある。

君はアララギの將星である、したがつてその歌調はアララギの同人に似通ひしものが多い、「長塚節の葬式」をよむと齋藤茂吉君の赤光の母の死がおもひだされる、「清澄山」や「信濃路」をよむと伊藤左千夫、島木赤彦君のそれがしのぼる、「酒藏」をよむと中村憲吉君が眼昭前にうかんでくる、「孕猫」「乞食」「露のたう」「松露」「入院中」などの連作などよみゆけば、正岡子規子の病床中の連作がしのばれる、しかもいづれを見てもそこに平福百穂その人の自らなる領がある、それはいかにも清楚である、その格秀でその調は高い。

こゝにして岩鷲山のひむがしの

岩手の山は傾きて見ゆ (國見峠)

はるくくに天さかり來てこゝに見る

草木素枯れて寒き色滿つ (阿寒湖)

いにしへの國を境す嶺のうへ

岩手秋田の國をさかひす (仙岩峠)

しかもそこにある新しきがある、ある鋭さがある、ある力がある。

芝口の土管置場の日のひかり

乞食つどひて物いひてをり (乞食)

ぬかる路いまだ凍てねど下駄にかたし

今宵は寒さきびしくあらむ (餘寒)

足のもとにくづれこぼるゝ山土の

おのづからにし止まる閑けさ (清澄山)

ふきのたふを日向にむけてぬくぬくし

たま〜動く蠅一つ居り (露のたふ)

などが目につく。

由來畫伯といふ本職があるために君の歌は餘技として看過されやすい、もし歌が本職であつたら歌人としての百穂の名はいや高くもてはやされてる事であらう、寒竹を見るそこに豫讓の筆致がうかんでくる、七面鳥の歌がでるとまたその彩筆が連想されてくる、僕は寒竹一卷に目を通して君の歌に頭を下げざるを得ない。

平福百穂その人の風格が歌となり畫となる、渾然として二にして、一、一にして二である、その卷末記を讀んで宜なるかなとうなづかれる、それは大正十年の暮には門生らもちつとも顔を見せぬ、事毎に僕を興奮させた、僕はたゞ歌にのみよつて心神の平衡を保つて、眞劍に歌の苦勞といふことを知つて遂に繪の事を忘れ茫然と考へ込む事も少くなかつた、その後歌の爲には畫の時間を割かぬやうにした。

とある、更にその終りに

一面には自分の本業のことも顧みねばならぬ、自分の繪は凡て未成品である、よくいつても田舎の雜貨店のやうなものかも知れぬ、自分から藝術品と名乗るほどのも

のほない、しかしそこに造花や研をかけた貝細工やまがひもの、寶石は持合せない、歌も本筋のものではないことはいふまでもないけれども、双方共このまゝではない、五十の年は越えたが、六十七の齡も僕には何とも思はれない、生命のかぎりは向上しなくてはならないと思ふ。

まことや世の中の事は凡ては努力である、眞劍であらねばならぬ、霜におこる寒竹一冊は君が血ににじんだ精進の結晶である、われらひしくと教へらるゝところが多い。(昭三、二月東京朝日)

吉植庄亮君の『草原』

草原は大正十年から十三年にわたる吉植庄亮君新聞記者時代の歌五百五十首ををさめてある。

君の歌風はことごとくしく吹聴するまでもない、君がどんな人かそれもわざと紹介するまでもない、天真流露荒けづりのまゝすべてがすばくといつてのけられる。お尻もくそもおならもふぐりも、みな君の手にかゝつては樂々とうたはれてる。

ものおもふ心も持たずこのごろは

尻もふぐりも人にまかせつゝ (京大病院)

藤の花たべるる小鹿ほろくと

玉の黒くそひりにけるかな (奈良)

まろくと座りておじぎするころの

かくしあへなきひざ小僧かも

路べゆく人のひりたる屁の音も

つばらに聞きて冬はこもりし (大森木原)

君の山水さんすゐに放浪した歌、君が印旛沼の田園生活の歌、そこにも君の田園歌人でんえんかじんとしての特色がうたはれてるが、何分、

すが疊青き座敷ざしきにかすかにも

かけのひよ子のくそひりにけり

はまだ忍ぶべしとて

人間のすわる座敷ざしきに上り来て

子馬よろこべり追へばはねつゝ

ではたびく遊びにこいといはれてるが一寸考へさせられる。

維新前ゐしんぜんの歌人として橘の曙あけぼの維新後の歌人としてXと問はれたら、吉植庄亮よしうゑしやうすけと答へ

たいやうな氣もする。たゞし吉植君よしうゑくんははち切れさうな五體ごたいに紅い林檎りんごのやうな顔をのせてある、樂天的らくてんてきな純朴じゆんぱくな快活な尻しりつばしよりのへこ帯おびの草履ぞうりばきで一升徳利を枕まくらにして青空を見上てる氣分がある。

草原くさほらを通じて現れる感じは作者ののびくとした屈託くつたくのない情緒が、ひとり山花草木ばかりでない親子夫婦おやこいづかの間にも、づけくくと現れてる事である。

叱しかられてわが家妻のかきならず

白玉しらたまの涙賣なみるよしもがな

手の荒れを妻はなけゝどこの冬を

ことなく越してはゝのくゝれたる

獨り食ひとふ夕ゆふけはまづしわが注つける

刺身さしみのしたちかび浮うきにけり

などがおもしろい。

草原の特色は政治記者といふ殺風景な生活の中から歌が生れるといふ事である。作者は「政治の外に大なる自然があり活社会があり、それづくに心の持主である自分がある。どんな職業をしてるても歌は出来るものであると知つた」と記してある、四十六議會の印象として

わが國を背負ひて立つとふ人々の

ものいふ聞けばわが國危し

安んじて米作り得ぬこの國を

みづほの國といふはかしこし

日本の本の國の帳尻の合ふ合はぬ

談ねむたく春たちにけり

後繼内閣模索には

秋づきてにはかに多きせみの聲

いづれのこゝろに聞くべかるらむ

震災復興計畫に

益良雄やまれに言あけすむら肝の

心かたむけてなすべき極みに

日の本のおみのおとゞは焼鐵の

右に左にその言をまけぬ

などがおもしろい、おもしろいことはおもしろいが、さてかうした世相をうたふ事は餘計に困難であり、又世間からうけない。現に作者も大正十年の歌は四五百首歌つたが、歌集へとなると四十八首になつたといつてゐる。しかしそれだけにかうした天地を歌うた事を多とせねばならぬ。

戸別訪問手記や春影抄は百首にも近いが、これは父庄一郎君のために君が山村水廓を戸別訪問にでかけた時の歌日記である。

あかねさす春のまひるを飲^のまされて

かたじけなくもわが酔ひにけり

しるしらぬおとづれゆきてひたすらに

首垂^{くびた}れねがふ言のさびしさ

早蕨^{さわらび}のこぶしほぐれむ惜しけくと

見つつしけふも春の山こゆ

作者^{さくしや}が人を訪問した門先^{かどさき}で縁をかりて寝ころんでゐる間に、山の中で、田のあぜで、船の中で、私はそこで春のふところに全く抱かれてゐる自分^{じぶん}を見出^{みいだ}したとかいてある。ことに僕は湯河原^{ゆがはら}の老いらくの父に面した歌を涙ぐましく讀んだ。吉植庄一郎^{よしうゑしやういちろう}と庄亮君、その進みゆく途は異なれど、あゝも姿^{すがた}のよう似た親^{おや}と子^こはない。赤門は出たが田園歌人として印旛沼^{いんはね}の畔^{ほとり}に馬のけつをたゝいてゐた子は、親のために戸別訪問^{こべつほうもん}に回つてゐる。あの庄亮君の心持あゝの氣分^{きぶん}で訪問されてはさすがにだれも札を君の大人にいれ

ずばなるまい。

吉植庄一郎君の實は商工副大臣^{しやうこうふくだいじん}とかなんとかいふ肩書でもない、他日^{たじつ}の大臣とかなんとかいふものでもない、正しくその子庄亮君^{こしやうすけくん}である。その庄亮君は今や又逐鹿場裏^{じちやうくわどう}に日夜活動^{じつや}をつゞけてゐる事だらう。や、なにかといふ中これは飛んだ脱線^{だつせん}をしたものである。馬鹿々々しく草原^{くさばら}の中で路を迷うて仕舞うた、由來鬼熊事件^{ゆらいおにくまじけん}をまたずとも八幡のやぶ知らずで名高^{なだか}い千葉縣の草原は草もあまりにとりぐである。

(昭三、二月東京朝日)

腹 と 腰

前後からいへば腹は前にあり腰はうしろである。上下からいへば腹は上であり腰は下である。とはいへ俗に下つ腹に力を入れるといふ、あの臍下丹田といはれるところ、腰の中堅にあたる越中ふんどしのくくり目にあたるところは、前後の相違こそあれ大體背中は合せである、いや腹中は合せ腰中は合せである。

昨年くれのある朝の事であつた、はやぐと省線の電車にのり込む、はやぐといふて見たが宵つぱり朝寝坊の僕としての早々といふので、時計は午前七時ながしをさしてゐるが、もう季節も十一月とあればまあ早いぶんにしておかう。

ふと前の腰掛にうつむいて雑誌を見入つてゐた一人の乗客がある、ぬつと顔をあげた、まさしく僕とその長さを争ふに足る長い顔をあけた、その視線と僕の視線とぶつかる、心もち僕より長いかなあと思はれる顔の持主はまさしく永田青嵐宗匠であ

る、とおもふと此秋上院の支那視察團の一行に加つて宗匠東京を出發する、

沙魚日和惜みながらに首途かな

と口ずさんで六郷川を通つたといふ、葉書をよこした事が思ひだされ、さてこそはと

「や、釣かね！」

といふと宗匠は

「うん釣だ！ 君やまたどうしたんだい？」

「ゴルフさ一寸程ヶ谷へ」

「旨いんかい？」

「い、やから下手だ、此夏皮膚病になやまされて醫者から運動をすゝめられたので、

去年の九月の末からはじめたのだよ」

「近頃ばかりに流行出したね」

これから先は久米正雄君や里見とん君の筆にかゝると、この電車内の物語だけで二

十回三十回と會話のうけわたしがつゞく、同じ電車の中で兩人とも男で、似た年配で同じ洋装で、いづれも長い顔で、それが相面して話し合つてただけだから、さし畫の方をうけもつた畫家の身になるとまさに閉口頓首するところだが、當方は何分とも、「腹と腰」の方へいそぐから、兩人の會話は此邊ではし折る事にする。

そこで青嵐宗匠がそのよみさしの雑誌「ホト、ギス」を僕に手渡してこゝを讀んで見給へといふ、見ると青嵐の筆になる釣のはなしがある、千葉方面は江戸川から利根川べりへ朝早々と釣に出かけてからが、第一餌でしくじる、釣針でしくじる、今度は釣れてからでは無かつた餌に喰ひついてからが、釣り上げると糸が切れる、そばに釣竿を垂れてゐた法被の先生から。

「おまへさんのように、手先で釣竿をあけちや、糸は切れるにきまつてますよ、腹で釣らなくちやね」

と一本やられるところがある、なるほどゴルフでもクラブを振るときに、手先でふ

る腕でふる、馬鹿力を出しても球は一向に飛ばない、先生からは力をぬいて腰でふれ腹でふれといはれるが、理合は矢つ張り一つだなおもふ。

これが弓にしてが同じ事だ。腰がきまつて腹が据はる、なによりも姿勢がきまらねばいかね、球つきだつて同じ事だ、手先に馬鹿力を入れても球は動かない、キューの冴えは腰にある下つ腹にある。

演説でも同じ事だ、浪花節なほしかり、長唄でも常盤津でも清元でも義太夫でも、一として腹に力を入れずに聲は出るものではない、舌の聲喉の聲から下つ腹の聲になつてはじめて聲らしい聲になる、豈それ獨り釣のみならんやおもふ。

十二月の十一日であつた、第九回の萬國オリムピック大會の馬術に参加する、遊佐岡田、城戸、吉田の四將校のため、東京朝日新聞社は帝國馬匹協會と共に戸山學校内に送別の大會を催した。

高さ一メートル二十から幅一メートル五十に至る八つの障礙物は連続的に飛び越さ

れる、自由躍乗と譯されてゐるクールベット（後脚立姿）や連続カブリオール（後脚蹴り）など、樂々と飛んで見せる跳ねて見せる、岡田少佐と遊佐中佐が相次で試みた純馬場馬術に至りては、速足に驅足に、短縮驅足に、伸張驅走に、旋回に横行に斜行に、前に後に左に右に、或は早く或はおそく、或は高く或は低く、鞍上人なく鞍下馬なし、遊佐中佐が軍樂の音樂の音につれ、馬蹄軽くスペイン・ダンスの足拍子をとるに至りては、神人同體といふ詞があるが、これは人馬同體で騎士の思ふがまゝに己れが手足の如く動いてゆく、まさしく以心傳心とでもいふのであらう。

馬匹協會の西尾忠方子の曰く、すべては腰です、人間と馬とその重心が一つになる、センター・ヲフ・グラヴキチーが全く合致するとあとは腰一つです。鞭とか手綱とか拍車とかいふのは、たゞ腰だめしのほんの御手傳ひに過ぎないのですといふ。

腰だ、腹だ……さういはれて見ると行住坐臥いつも腰と腹がしつかり据つてゐるねばならぬ。なにも聲を張り上げたり手足を働かす時ばかりではない、いつも人間は下つ

腹に力を入れてゐるとそこに身も心も落ち付がある、とおもふと兎角我ながら肝心なところにもいつも力がぬけてゐるなあと今更のように心づく。

今年の一月から二月にかけて、普選の激勵演説會で近畿から中國九州を巡演する、熊本のときやの旅の宿で同行の末廣重雄君に、

「君はあの日露戦役前の洋行の時は大分短銃の稽古がつんだやうだつたねえ」と話の糸口をひいて見ると、

「あれは瑞西在留中の事で、瑞西はアルプスの狩獵から國民みな銃を手にする、中世には各國から傭兵にと注文がくる、ウキルヘルム、テルの我子の頭の上に林檎を射た話も、瑞西國民の銃に堪能であるといふ一のエピソードで、僕も練習をつけて三四間をへだてたトランプのカードのしるしを一つづつ射貫くやうになつたよ」といふ、そこで祕傳はとたづねると腹と腰のすはりだねといふ、矢つぱり同じ人間のやる藝當であれば結局は腹と腰に落ちつく見える、柔道も撃劍もみな腹だ腰だ、國

技館の相撲もさうだ、日比谷の政戦もさうだ、たゞ近頃の政治家には首を締めたり張り倒したりする小手先の早業は見えてる、ペラ／＼と唇の上下動は見えてる、しかし日本といふ國どころか眞に我黨の爲にしてが、大處高處に立ちぐつと腰を据ゑ下つ腹に力を入れてる役者に至りてはあまりに拂底してゐる、手は振り上げてゐる、聲は張り上げてゐる、が腹はべしやんこで腰はふらついてゐる。あゝ腹なるかな、あゝ腰なるかなである。

(三三二、二七法律春秋)

聖堂の一日

上、大成殿の今昔

將門の前に孔子がけつを出し

鳳凰の尻からみつく鬼狀頭

將門を横目でにらむ鬼龍狀

お茶の水のアパートメント、往來に面した三階にはや日がてりはえて、赤茶が、つたカーテンにはガラス窓の木枠のかげをクツキリと浮み出してる。小春日和とでもいふのであらう、近頃はない好い天氣だ、この休日をどう暮したものかと、寢臺の上で思ひきり兩足をのばして天井を見つめながら、靜かにその日のプログラムをあれやこれやと頭へゑがき出したり消したりしてゐる。

生憎とエクヂエーマといふ皮膚病にとりつかれてまだなほりきらない、折角の日曜

日だが紅葉狩に遠出も出来ず、といふてゴルフのクラブも振れず、夜は九條武子夫人の無憂華の會に先約あるが、此日和を茗溪の一室にくすぶつてるのも勿體ない、今日は神宮の外苑やあちこちに六大チームの野球をはじめラグビーやいろ／＼のスポーツもあるらしい、ことに大森の庭球コートでは東京日々主催のリチャード選手せんしゆの模範試合がある、シングルがリチャード對原田、ダブルがリチャード原田に安部川尻あべがはじりとある、外人の選手とあればまた二度とおめにはかゝれない、さうだ大森の庭球を見物するとしよう、それにしてはまだおひるまで時間が少々あまつてる、はてどうしたものであらう。

おゝそれよ程遠からぬ同じお茶の水の聖堂には、今日は十月の二十三日とあつて斯文會主催の孔子祭がある、實は十三歳のとしに和歌山から東京にでゝ来て、いつか一度は見よう／＼とおもひながら、春秋こゝに四十年、朱舜水が水戸公のために造つた木造の模型により、幕府の手で實現された大成殿、維新の當初新設せられた大學南校といひ東校といふたも、此建物を中心にしたといふその大成殿、平將門の胴體を祭つ

たと傳へられてる神田明神をうしろにして、「將門の前に孔子がけつを出し」と川柳にうたはれたその大成殿、棟の兩端には鬼瓦おにがはらともしやちほことも見えぬ龍頭魚身双角双脚の鬼狀頭きじやうとうやら、その屋根の四隅には二個づゝの猫形蛇腹にして牙ある鬼龍子きりゆうしと稱せられたものなどが青空をにらんでゐたその大成殿も、大震災のため一炬に付せられてとう／＼見ず仕舞になつてしまつた。今日は孔子祭の拜觀はいくわんをかねて、せめてその殘墟せんとなりと見る事にしよう、同じお茶の水の氏子になつてゐるのだから。

教育博物館の入口から左にそれて二町ばかり、石階を上つて杏壇門がある、大成殿は盛儀の壯觀なる建造の莊麗なる、たとひその面積に於て北京の大成殿に及ばざるも、その美觀びくわんにおいて遙に勝れ實に東洋第一といふべきものであつたといはれてるが、なるほど面積では北京の大成殿より狭い、臺南の大成殿よりも狭いとおもふ、美觀に於ては北京のそれは明治三十四年團匪の後であつたからでもあらう、廣々とした前庭は雑草ざつさうり離々として生ひしけり、堂の中は塵埃ちんあいにまみれてたゞ荒廢に委せられてあつた、

臺南の孔子廟は修理したばかりでもあらうが、本殿から東配殿西配殿そこにはいろいろの樂器類が揃へられてあり、孔子祭には普通りの儀禮がとり行はれたものだが、今日になつてはお茶の水の聖堂は凡て焼けうせていづれをそれと比べやうもない、間口二十三間六尺奥行十七間二尺の廣場には、殘墟の石礎のあとが點々散在してゐる、そこにはテントが張られて椅子がならんでゐる、斯文會員や學校の生徒で七八分通り埋められてある、正面の中央更に階を昇つて七間と十四間の高壇には大成殿があつたらしい、今は御多分に洩れずバラック建になつてゐる、その假屋の正面の壇上には正位孔夫子の畫像の軸が見える、焼失した聖堂も復興後はその昔朱舜水が俸祿の半をさきて扶養してくれた筑後柳河の安東省庵に贈つたと傳へられてゐる舜水支那傳來の聖像が、宮中から御下賜になると傳へられてゐる、孔夫子の畫像に面して右側東配には子思顔子の畫像左側西配には曾子孟子の畫像がまつられてゐる、祭壇に向つて左には斯文會々長徳川家達公爵は燕尾服で勳綬を帯びて控へてゐる、右には水野文相はじめ四人の洋装の

人が腰をならべてゐる。

中、正位四配の陳説

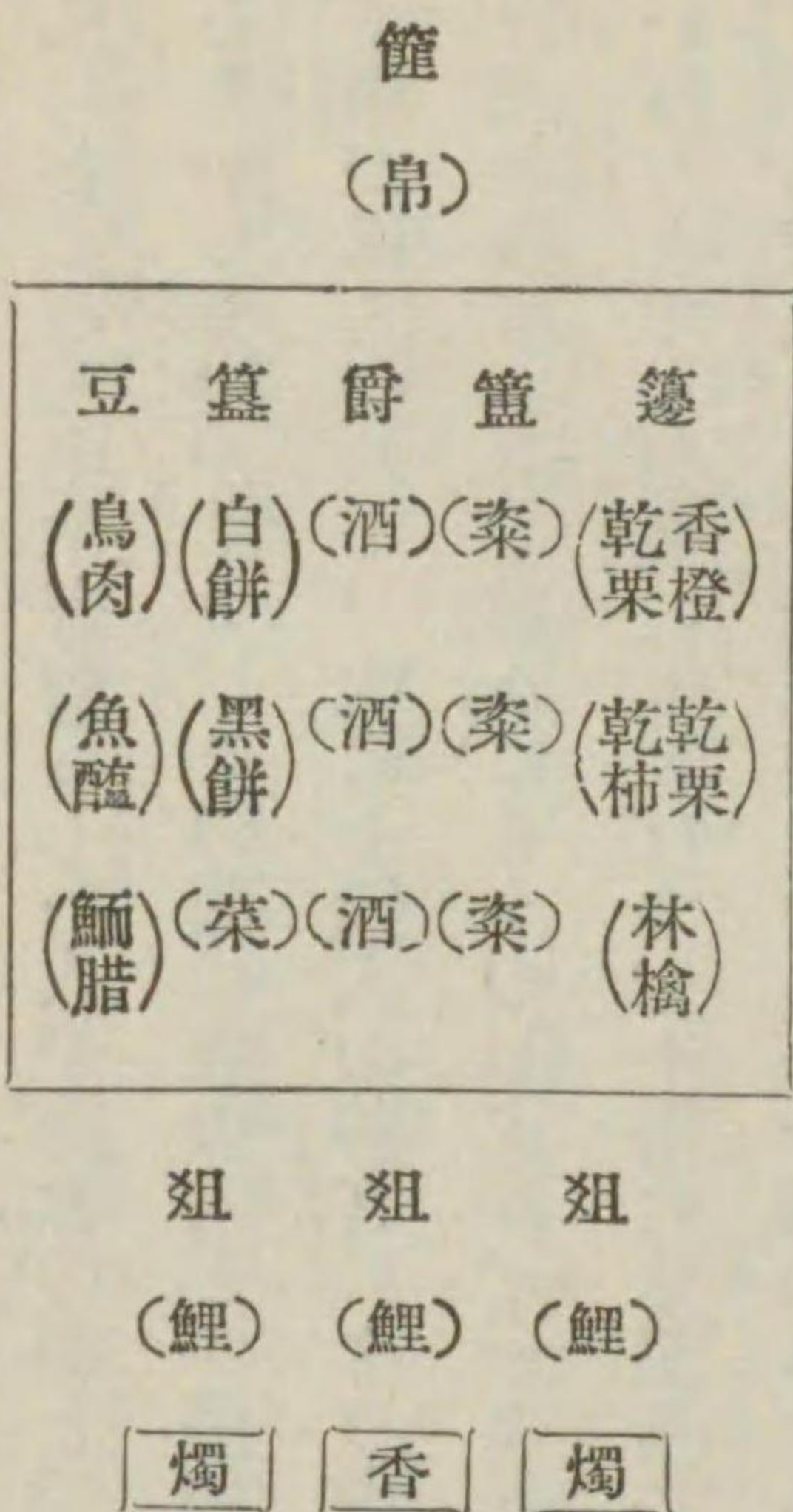
僕はこの群衆の最後の列の一脚に居つたから、大分間隔があつて能く聞とれなかつたが、見たところ三宅米吉翁らしい人が開會の辭とでもいふやうなことを長々とのべる、それから奏樂があり、その間に稜の式とか降神の式のつとなど、定例による神式の手順がはこばれて、次に十餘人の神官により奏樂の間に何十通りと數多き供へ物を一々三步四歩にして順々に手うつしする、一々五聖の卓上に陳列する、此間の長い事長い事、とても想像にも及ばず、十階にも足らぬところを右から左へ左から右へと、丁度日露戦後前の東清鐵道興安嶺の十餘のスウキチバックにも左も似たり、極めて丁重に三拜九拜して徐々に手うつしされるのだから、太平の象といはゞいへ悠々閑閑として昭和の時代にそぐはざる事夥しい。

先づその事體の重々しかりし事を證明するために、その陳設圖を御披露するが、そ

の供饌の用語と来ては恐く普通の漢字々典にも一寸見當らない、況んや活字に於てをや、さうした活字が出来ないといふなら、竹冠に邊といふ字だとか、竹冠に甫の字に皿の字をつけるとか、その邊は然るべくやつてくれ給へ。

正位陳設圖

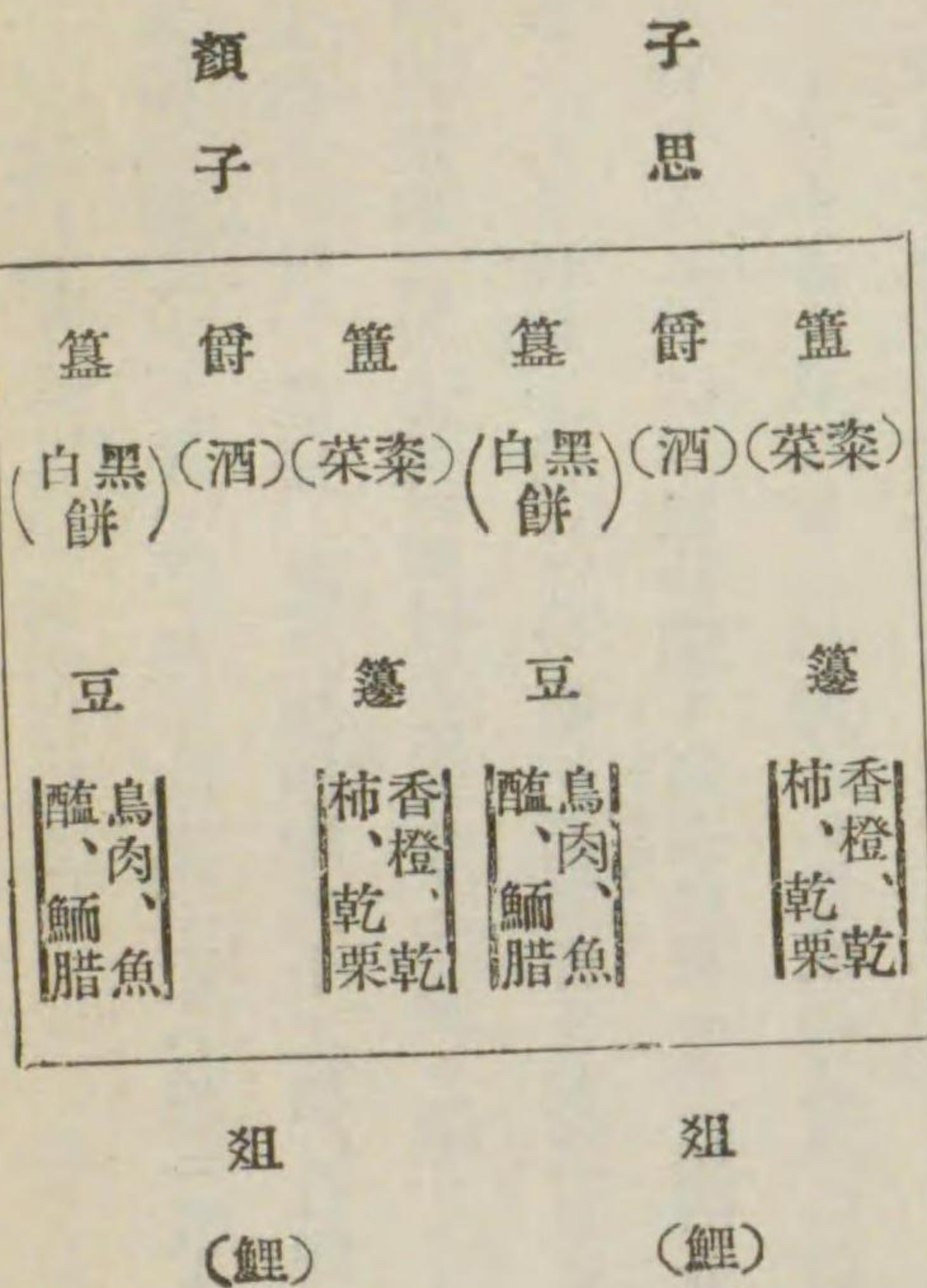
三三六



その備考に曰く

籩一案、簋籩籩豆爵(各三)共案、兩燭各一案、香一案、三俎皆地ニ置ク「菜各一升共三個」白餅、蒸糯米一器五個「黑餅、蒸糯米胡麻子用升ヲ研シテ以テ之ニ衣

三三七



セシム亦一器五個「鳥肉、鴨ヲ用フ一羽ヲ醃藏シ切テ薄片ト爲ス」魚醢、鮭魚ヲ藏シ切テ薄片ト爲ス「鮪腊、カラスミ亦切テ薄片ト爲ス」鯉魚一器一尾」帛、奉書五張ヲ卷キ朱白水引ヲ用ヒ中央ヲ結束ス酒、醇酒「菜青菁菜ヲ切テ寸斷トナス」果肉醢腊籩豆ノ容量ニ随フ

四配陳設圖

曾子孟子又之に同じくその備考に曰く

簠簋籩豆爵(各一)子思、顔子共案、俎八地ニ置ク、曾子孟子共榮、俎八地ニ置ク
 棗五合共二升、黑餅一器三個四配共十二個「白餅一器二個、四配共八個」鯉魚一器
 一尾四配共四個「果肉醢腊亦籩豆ノ容量ニ隨フ

いとも長々しき供饌が終ると、徳川斯文會々長より至聖先師孔子の靈に、夫子道天地に配し徳日月に並ぶ、風教遍く東邦に被り、化澤永く後昆に垂るといふやうな祝文がよみ上げられる、次で四人の壇上の洋装の人々の禮拜あり、終つてその主席にあつた水野文相よりその一段高いところから、廣場の會衆に面して一場の話がはじまる。

下、水野鍊太郎と山崎闇齋

僕は屢々水野鍊太郎君の朗讀や演説を聞いた事がある、この日は文相としての例の巻紙で型にはまつた名文を朗讀することかと思つたら、演説であつた事は何よりも好かつた、又その話が斯文學會の人々つまり漢學中心の人々に對してただけに、一々論

語の中の文句を援用して話したのも極めて要領をえた事とおもつた。その話には先づ日本の孔子祭の支那式によらず日本固有の神式を用ゐた事を稱揚した、由來日本の孔子祭は大寶令に明記せられ王朝時代には國祭として大きな年中行事になつてゐた、それが戰國時代に廢頓して徳川氏となり、幕府はもとより三百諸侯それら孔子祭を催すことゝなつた、幕府の孔子祭は支那本國の風にならつたさうであるが、明治以來次第に變化して今日に及んだらしい、現に復興の計畫では神殿連りになると傳へられてゐる。尤も聖廟の神殿造りは今に始まつた事ではない、三百餘年前肥前の多久では一萬石の祿高にすぎなかつたが、堂々たる神殿造りの聖廟を建立した、領主の文章の内にも「民衆何の神ぞやといぶかるであらう、曰くこれ文教の神なり」と記してある、神殿造りから更に歩をすゝめて讃州高松から六七里はなれた孔聖神社。多久から二里ばかり山奥の孔子神社などは、頭から神社にして仕舞つてゐる。ことに孔子神社では孔子を氏神とし、氏子總代が神官となり祭田を付けてあるとの事である、まあこんな事を書

き立て一々純日本化^{じゆんにほんくわ}させて仕舞はねば氣のすまぬところに、日本の善惡^{ぜんあく}ともに特色があるなど、鹿爪らしく論ずるよりも、廻はれ右をして水野文相^{みづのぶんしやう}の演説に立ち戻る事にする。

文相の演説はそれから和魂漢才^{わきかんさい}とでもいふのであらう、孔子祭の日本化^{にほんくわ}より一步を進めて漢學思想^{かんがくしき}の日本化ともいふべき論點を強調^{きやうてう}し、彼の山崎闇齋^{やまざきあんさい}が門下生一同に、「お前たちは今孔子孟子が^{たいしやう}大將になり軍を進めて日本に攻めよせたらどうするか」といふ問を出し、その孔子孟子^{こうしもうし}に向ひ敢然として戦ふ事が孔孟の祭^{まつり}だといふた、あの話を引用した。

僕はこゝに文相の話を非難^{ひなん}したり反駁するつもりでない、只神式で孔子祭^{こうしさい}をした、それも是非支那式^{せひしなしき}を廢すべしともおもはぬ、臺灣では屢々孔子祭に臨んだが孔子祭は孔子祭として支那固有^{しなこいう}の式で行ふのもいろ／＼と教へられる處がある、といふて神式でやつてわるいとも思はぬ、只僕は式^{しき}そのものも形式^{けいしき}としては時代を逐ふて推移して

しかるべしとおもふ。

神式の樂器はあのせうしちりきとか笛とかで比較的單調^{ひかくてきたんてう}なりズムをくりかへしてゐるが、あのまゝでよいのか、又山海の新饌^{またんかい}を供へ又之を撤する、これがいつも殆んど神式となると時間の八九分通りを占めてゐる、この日の供饌の様子^{やうす}を見ても、十階にも足らぬ石階へ十餘人の神官^{しんくわん}が左右に居ながれて、それが右から左へ左から右へと恭しくチグザグにお供物を授受^{くもつ}してゐるには少なからず恐縮^{きようしゆく}した、現に會長も斯文會の役員たちも水野文相はじめ賓客も參會^{さんかい}の人々も、嘸草臥^{ふたがれ}た事であらう、しかも御當人^{ごたうじん}たちはどんな服装^{ふくさう}で參拜してゐたとおもふ？ 時勢^{じせい}の推移はあり／＼と暗示ではない明示されてゐるではないか？ 御互に少し眞面目^{まじめ}に考へたい。

ことに山崎闇齋^{やまざきあんさい}の話は和魂漢才^{わきかんさい}といふための引例としてよりも、いかに日本^{にほん}が支那化^{しなくわ}してゐたかといふ引例^{いんれい}としてしかるべきものであるまいか、奈良朝平安朝^{ならてうへいあんてう}にかけて先進國^{せんしんこく}たる支那の文化の滔々として我朝野^{わがてうや}に浸潤したるは、佛教の弘布^{くわふ}と相まちてま

ことに想像以上であつた。それが南北朝足利に至り天下麻の如く亂れ文教地に墜ちた感があつたが、徳川氏が儒教に力を入れだしてからは再び滔天の勢を馴致し、朝野の學者はみな儒教に酔ふた、酔へばこそ闇齋をしてあゝした問を發せしむるに至らしめた、しかも此問に對して一同口を緘して答へ得なかつたといふではないか。

幕政になつた儒宗とも見るべき人々にして、自から冠するに東夷の二字を以てし、姓名をわざ／＼物茂卿といふように二字にちゞめ正に漢魂漢才になつてゐるたから、今日では頭から問題にもならなかつた事が、當時大きな問題になり今猶語り草にすらなつたのである。水野文相は昔から日本では／＼といふ一例に和魂漢才の例として話したように聞かれてたが、これは昔しは漢魂漢才の時代もあつた、今はしからずといふ引例にした方がむしろ事實に當つてゐるのではあるまいか。

よく日本では昔もかうだから昔もかうだからといふ事を忠君に愛君にあらゆる問題に取つて付ける癖がある、それを必ずしも悪いとは云はぬが、われ／＼は昔もかうだから今もかうせねばならぬとそのまゝに押しつける必要がない、よしんば過去がいかにあらうと、現在がいかにあらうとも、よきはすゝめあしきは矯める、要は吾々は「日本人である」といふので澤山である、どうだからかうだからと引例するもよしわるしで、時には打算的に聞えて面白くない、われ／＼はそんな水臭い忠君や愛國は持ち合しておらぬはづである。

そんな事を次から次へと連想してると、何分例の供饌で馬鹿々々しく暇取つたためもうおひるになつてゐる。

大森のリチャード選手の競技を見落すも残念である、聖堂をあとにお茶の水にでる、その昔し江戸城の外濠として仙臺侯であつたか、土工を承つたと傳へられてゐるお茶の水の掘り割り、その岸の中段には汽車がはしつてる、電車がはしつてる、その上に新に聖橋といふ橋がかゝつた、眼の前には河を隔て、ニコライの會堂は聖堂と同じく大震火災のいけにえとなつて、そのまゝの廢墟の姿を秋の中空にうかめてゐる。

(孔子祭の文献は横山健堂君に負ふ處が多い、終りに斯文會で募集當選の孔子頌徳の歌をそへる)(昭、二、十一)

一

泰山萬古雲に立ち
孔子の偉業盛徳は

泗川千歳水あせす
山河と共に盡きせじな

二

孝悌忠信百行を
修身齊家萬民を

貫く道は一つにて
導く本は仁にあり

三

傳へし道は敷島の
色香も妙に咲き出でし

大和心をうるほして
御國のはなぞうるはしき

四

湯島の岡にそびえたつ
ひとの幸福世の中の

大成殿の中よりぞ
平和の光輝かん

朝鮮のキヤデキ、支那のキヤデキ

一

ゴルフの七つ道具の袋をかついで行く子供をキヤデキといふ。
きれいに刈り込んだ本街道ばかり球が飛んでゆくなら、キヤデキの仕事もらくな
ものだが、初學の徒はもとより、古顔になつても、兎角球を横道の草原や松林などに
かつとばしたがる、こゝにおいてキヤデキはいつも球さがしに憂き身をやつさねば
ならぬ、どこにも樂な商賣がない。

朝鮮のキヤデキは飛ばした球を追ひかけてゆく、投げた球のそばに立つて主人の
來るのを待つてる。

支那のキヤデキはのそくと主人のあとについて來る、一處になつてゴソくと
さがす。

二

草原に飛ばした球をい、かけんさがしても見つからない。

『おもうい、から捜さなくともい、よ』といふ。

朝鮮のキャデキーはなほ熱心にさがしつづける、それでもさがしあてない。プレイが済んであとで獨り又わざ／＼出かけていつてもさがし出してくる。

支那のキャデキーは『おもうい、よ』といはない中にのそ／＼引上げて来る。

『有つたのか?』といふと沒有……無い……と答へる、ケロリとしてる。

自動車で乗りつける、支那のキャデキーは雲霞の如く取り圍む、ゴルフの袋を我れ勝ちに取り合ふ、ゴルフ氣分と正反對の修羅場の氣分となるから物凄い。

三

草原に飛ばした球がいつも轉々して凹んだところに落ち込むはずだが、いつもちやんと打ち安いところに鎮座して、鎮座してのではない、朝鮮のキャデキーはわざわざ置きかへて、打ち安いところへ鎮座してあるのである。

支那のキャデキーは時には見付かつても知らぬ振りをしてる、あとで拾ひ玉としてクラブへとどけると、なにがしかの収入になるからである。

四

朝鮮のキャデキーはただに打ち安いところへ置きかへるばかりでない、その近邊の草をむしりとる、小松の枝はナイフで切りとる、打ちにくいと見るとそばに伸びてる松が枝に両手をかけて宙ぶらりんになる、うんとわきへ引つ張る、規則違反もこゝまでくれば愛嬌である。

支那のキャデキーは見つかつた球を知らぬ振りするは猶恕すべし、なんだか見つか

りさうだと思ふと、わざ／＼草むらや土をほちくつてかくすことがある、勿論、たまたまの話である、たまたまの話であるがそれにしても餘りのことである、たまたまのものではない。

五

各コースで最初の打出しにはチーといふ球をのせる紐付のゴム臺の上に乗せて打つことが出来る、ところが少々あがり氣味になつてると、打つたあとでそのチーを拾ふてゆく事を忘れる、次のコースに来て氣がつく、あゝ忘れたとキャデキーに取りにやると、すぐ使ひ賃を請求する、球を小川に投げ込む、とりあけるに骨が折れたといふては酒手をねだる、球を見失ふと古い球とすりかへる、あとから草刈男などの手を通してこゝに球があつたと持つてくる、そしてなにがしかにありつかうとする。

一にも金、二にも金、三にも金の支那のキャデキーにはほと／＼愛想もくそもつき

はてた。

舊友篠田治策君は世子殿下に御供したとき、ゴルフが公務の一端とあり、大びらに歐洲で數十ヶ所のゴルフリンクに妙技？を揮つたらしいが、どうも朝鮮のキャデキーはいゝよ、世界一だよと嘆稱してゐる。

もと／＼朝鮮のキャデキーは日本語を話す、支那のキャデキーは日本語はもとより英語すら話さない。どうせ外來のものはどこでも馬鹿にされる、況んや言語不通である、好い加減に誤魔化される。

朝鮮のキャデキーはなるほどいゝ、世界一である、同時に僕は附け足しておく、支那のキャデキーはわるい、世界一だと。(三年暮朝鮮朝日)

支那のキヤデキ

勘定の動物

人間は感情の動物なり、感情勘定に通ず豈それ恐れて慎しまざるべけんや。

朝鮮から滿洲北支に旅して所在ゴルフリンクに遊んだが、少からず支那のキヤデキに感情を害せられた、勘定もごま化された、なにも支那のキヤデキにより支那の國民性を論ずといふやうな仰山なものでもないが、あまりに忌々しいからつる筆にすゝることになつた。

ゴルフ流行時代となつたが、それにつけても世界中で日本の内地ほどべら棒に物價高直な處はどこにもない。英米其他いづれの地にありても、ゴルフは極めて手軽である、パブリック・リンクは何人にも享樂の途を開いてる、シーズン・チケットで殆んど無代同様であそべる、紐育の下街のただ中にでも、大きなデパートメントストア

の屋上にはリンクができて、銀行會社のクラーク連も食後屋上のリンクを一寸一と廻りする事ができる。

滿鮮のゴルフ

それが日本では土地の値が高いからでもあらう、外國のやうに簡單にはまるらぬ、それなら朝鮮支那はどうであらう、今朝鮮では大邱京城元山平壤の四ヶ處に、滿洲では安東縣奉天長春ハルビン旅順鞍山站大連の七ヶ所に北支には天津に青島に、さらに北京には二ヶ所ある。その數ある中にて京城の清涼里と北京の八方山の外は、いづれも町中か町はづれにあつて電車の便があり、人力車又は自動車にしても極めて近い、大連や青島などはホテルとリンクが隣り合つてゐる。

どこのクラブも入會金の無いところがあり、あつても十圓二十圓せいゝ五十圓位であり、グリーン・フキといふ一回毎の使用料はとらざるを原則とし、球拾ひの子

供であるキャデキーは内地にくらべて一と廻り五錢十錢などいふのだからとても安い元山などでは月五圓の會費打切りで日曜日の自動車賃まで込めてあるのだらう、サンドウキツチ携帶でゆけばお辨當代もいらぬ、お金の使ひようがない。

況んや況んやである、あの辨慶の七つ道具に似たクラブを一揃ひバッグに入れると、日本といふ國では何分にも物價は世界一の高値といふ看板をかけてる手前、百五十圓がらみ奮發せねばならないが、上海や大連邊では半額以下で手に入れられる、クラブは先づ一回限りだからよいとしても、一番困るのはあの球である。

三十四ヶ處のクラブ疵

ゴルフの球も中々丈夫に出來てるが、何分初心のうちにはあのクラブといふ金物で土をたゞく時はよいとして、兎角トツプして球の頭をなぐりたがる、そこであの眞白な球が縦横に切りさいなまれて、切られ與三郎ぢやないが三十四ヶ所のクラブ疵になり、

早くもローズになり易い。

それよりも困るのは球の紛失する事である、初心のうちには球が覗つた通り眞すぐに飛んでくれない、始めから見當ちがひに右の植込左のラフ、處きらはずに脱線する、少し上達して球が大に飛ぶとしても素直に當つてないから、空中はるかに登つてから右にスライスし左にブルし、雑木林や草むらの中に消えてなくなる、捜したらえ、ぢやないかといふ、そりや捜しますよ、一個二圓以上もする球だ、河原で石をなける氣分とは大にちがふ、しかしいくら捜してもさう安々と分らうはずはない、球拾ひのキャデキーは球をさがすべく、プレイヤーと一處にごそくと紙屑拾ひがごみ捨場でうろついてるやうな態度をとつてるが、これ以て頗る面白くないからいゝ加減に切り上げざるを得ない、ことにはよく後續部隊があとからくり込んで來てるから、早くあきらめをつけぬと、いつまでも後續部隊に待つて貰ふわけにもいかない、仕方がないからさあどうかお先へ……と手をあけて合圖する、後續部隊はビューと虚空遙にうま

い事飛ばす、白い球はフエヤ、ウエーの刈り込んだ眞青な芝生の上にあり、と鎮坐して、悠々と落ちつき拂つてパイプでも口にくはへながら、笑ひ興じつゝお成り街道をしづしづと通りすがりに、やお先へ失禮など、挨拶されるされる身になるとあまりいゝ圖でない。

高くて球らぬ、球

初心の者は九ホールスまはれば二つ三つは無くする。ところが冬枯のときとか草刈のときなどに見失はれた球が出てくるから、後日の證據にといふのであの球に、しをつける、まさしく文身である刺墨である。それも蝶とか牡丹とか登り龍下り龍などなら乙だが、名前の極印だから無風流である。それを又赤や青や黒で大きくつけるに至つては、旗指物にさも似たり、全く以て野暮つたらしい。といつてなくしつばなしは困るから印をつけておくと、あとで何がしかの鳥目で元の主人の手に戻る、後日又

又藪や雑草の中にたゝき込まれるといふ寸法になつてゐる。この球の値が日本では倍以上高いからたまらない、勿論その筋では煙草などと同じやうに贅澤品だから十割以上の關稅をかけてもよろしいといふ、一體酒や煙草は上下を通じての嗜好品で、今更贅澤品だから重く課稅してもよいといふのは分らない、頭から止めさせたいのなら禁止稅をかけるなり禁酒禁煙しかりである。

脱線に脱線の枝が咲いて來たが、必用品の肉だつて卵だつて皆内地へくると値が倍以上になる。何分にも物價を高めて生計難に重荷をつけ、産業の振興を妨げて貿易のバランスを破り、一等國とか戦争成金とかいはれながら、只獨り金の解禁もようしないやうに心がけてる國なんだから全く以てやり切れない。

さて前口上も大分長すぎた、いよく本論支那のキャデキーに入る事にする。

バツグの争奪戦

奉天で張學良督軍と會見してから、引きかへし郊外のリンクにかけつけたが、クラブ、ハウスの前へ自動車^がが止まると、雲霞^{うんか}の如くというては大袈裟^{おほせき}すぎるが、とにかくキャデキ一の群^{ぐん}がとり圍んで戸が明けられない、やうくくに車を出るとキャデキ一連は我れ勝ちともみ合ひへし合ひクラブのバッグを取り合ふてる、十銭か二十銭のキャデキ一料^{れう}をかせぐべくまさしく修羅場^{しゅうらば}が演じられてるのである。北京の八方山^{はうばうざん}でも同じ藝當^{げいどう}がくりかへされたが、いかにもゴルフ氣分^{きぶん}を傷けられて不愉快^{ふゆくわい}になる、しかしこれは支那^{しな}のキャデキ一を責めるのは可愛想^{かあいさう}である。内地^{ないち}のその如く大連青島のその如く、キャデキ一の出場順番^{しゅつちやうじゆんぱん}をきめて置けばよい、内地だつてあの電車の乗降場^{みたま}を見給へ、豈^{あな}それ支那のキャデキ一のみを慨嘆^{がいたん}するにあたらんやである。

重ねくの御難

ところで例の如く巧妙^{こうめう}ならざる下手^{へた}くその我黨^{わがとう}は盛んに球を松林^{まつはやし}や草むらや黍畑^{あひぢ}な

どにぶち込む、指定^{しきてい}の境界線外^{けいがいせんがい}に飛ばした時はアウト・バウンドといふて無効^{むかう}になり打ち直しをする、つまりアウバンになるとそれだけ球打數^{きうだすう}が増すから點數^{てんすう}がふえる、ゴルフの方は十八のコースをより少ない打數^{だすう}で終るを勝ちとし、通例標準數^{つうれいひょうじゆんすう}に對して何點^{なんてん}といふハンデキ一がつく。ところでアウバンをやれば一コース一回づゝでもすぐ合計十八點になる、況んやその度に球搜^{たまさが}して氣分^{きぶん}が荒れてくる草臥^{くたび}れる、揚句^{あひく}が球の處在^{ちうざい}不明^{ふめい}となる、重ねくの御難^{ごなん}である。かるが故^{ゆゑ}にキャデキ一が忠實^{ちゅうじつ}で老巧^{らうかう}であると早く搜し出してくれるが、さもないと時間^{じかん}は潰れる球は見付^{みつ}からないやり切れぬむかつく。

スリカへ球

ところで支那^{しな}のゴルフ場で始めて經驗^{けいけん}した事は球のスリカへである、といふのはあちこち烏鷺^{うろ}々と搜しあぐねてると、有々^{うゑ}といひながら持つてくる、やれ嬉しやとそ

こそこ、ポツケツトに入れる。今度出して見ると、どうやら相好がちがつてる、色も少々小黒い創がついてる。球そのものがちがつてる——商標もちがひ。値段もちがふ、高い好い球が安球ととり代へられてる——こりやちがふぢやないかと文句をいふて見ても、もと／＼ありませなんだといへばそれまで、ある、ごたつけば只時間を喰ふだけで、それだけ清興の氣分を害する、此手も二回三回と喰はされると全く以て嬉しくない。

通 し 球

球のスリカへから一歩進んだのは通し球である、といふのはアウバンでもアウバンでなくとも、球が見つからなくてロストボールとあきらめ、そのまゝ廻つてると、今度は草刈の人夫がお前さきほど亡くした球があつたよと手をさし出す。結局十錢進上で球をとり戻すが、面白いのはシルヴァ、キングを亡くしたのにダンロップを持つて

くるといふやうに、必しもその亡くなつた球はさがし出さずとも、亡くなつた人に入天やキャデキーだちがふだん拾ひあけて手持になつてる球を賣り付ける、よく花骨牌に通し花をひくといふ詞があるが、通し球はこれが始めてである、この十錢がいづれ人夫とキャデキーの間に五分づゝとか、四分六づゝとか、ある歩合で分けになるのであらう。

球 取 物 語

これにつけても特に忌々しかつたのはこれははつきり處もかいておく、青島の第九コースであつた、K・Yといふ同人が極めて素直な高くよくのびたチーシヨト——チーといふ第一打を試みる場處からの球打——を出したが、手前に障礙物の土手があつて落ちたところは見えない、綺麗な廣々としたフェアウェイに出たが、球が一向に見當らない、いくら馬鹿々々しがつても腹を立て、見ても追つかない、まさしく今のさ

きこの芝生を横切つた人夫が失敬したのである、かうなると丸で無茶苦茶である。あとでなにがしかのチップが貰ひたさに捜し出すべき球をわざと有り相にもないところ捜がし廻はるといふ皮肉な手もあるが、あるリンクでは黍畑の中へアウバンした球を捜しにいつたあるキャデキーが、捜し出した球をわざと土の中へ埋めてる、それを見付けて叱り飛してるときは、もう／＼情ないやうないやな気がして、その組から離れてゲームをつけたが、丸で感興も失せてしまつて當りは餘計に悪くなつた。まあしかし球のスリカへ通し球もまだ罪が軽い、一番手取り早い荒療治はバッグの中の球がいつのまにか一つへり二つ減る。あるリンクでは土地の人からバッグをクラブへ預けて置くのもよろしいが、球だけはバッグへ入れておかれないがよいと注意してくれた。クラブハウスに保管さるべき筈のバッグに、球だけはのけとくが宜しいとあつてはもうおあいだである。

チーの拾ひ賃

北京胞馬廠でのリンクの話である、第一打を試みるべき場處にかぎつて球を打ちやすすべく、球をのせるゴムの臺チーなるものを使ふが、いゝ球をかつ飛ばしゆうゆうとチーをとりあげ、腰につけてゆくべきはずが、へボ球を打つて少々面喰つてるときは、チーをそのまま忘れてのこくと出かける、三四百ヤードのコースを終へて、次のコースのチーショットを試みようといふ時に、あゝチーを忘れたといふので、可愛想に又キャデキーを三四百ヤード往復してチーを取りにやる事、初心者やあわて者に其例乏しからず。ところで初心者兼あわて者のそれがしが例によりチーを忘れた。やつと引ずるやうにバッグをかついでる幼ないキャデキーに、おいバッグはこゝに置いて一と走りチーを取つてきてくれといふ、子供はもと來し所に引きかへす。さてその子供がチーを持つて來たかといふと、大供が子供の手からチーを横取りして吾前へ

持つてくる、そしてチップをくれと手をつきつける、五月蠅うるさいからあとで〜と追つ拂ふ、これが性こりもなくなつきまとふ、とてもおち〜とプレイが出来たものではない。

泣き賃請求

さうかとおもふと或る大供おほどものキャデキーは、同人どうじんK、Hがチーシヨットをやるべく、氣を鎮しづめて専心せんしんクラブをアドレスしてると、その破れ靴やぶを指ゆびしてクツ〜と笑わらふ八釜かたてしい静しずにしろと、片手のままクラブでその大僧の脊中せなかを、左様撫なでるといふでもなしさてどやすといふでもない、一つ叩くと何思なにおもひけんその大僧おほそうは、バッグをそこへなけ出しひつくりかへつてオイ〜と泣く號泣ごうきする、馬鹿ばか々々しく呆氣あつけに取られてると、案内役あんないやくのプレイヤーK・Y公使が、一喝いちかくして憚たげ不要ニイプヨウだお金はやらぬ、おい誰か代りをといふと、ほかのキャデキーは應來おうらいとばかりに馳おけつけてくる、こりやたまらぬ

とばかりに大僧おほそうも號泣ごうきを中止し、あわて、バッグをかつぐ、これを見た一同思はず吹き出す、誰か代りといふ時に大急おほいそぎで代役たいやくを引きうけようと飛んでくるキャデキー仲間ちゆうけんの心理しんりと、その様子を見て取つて忽ち方針を一變おほする大僧おほそうの心理は、いづれも一寸支那しなでなければ見られない圖ずだなあと思つた。

没 法 子

際限さいげんがなくなるから最後にクラブの事務員じむいんの分を一くさり書きそへる。

これもはつきり書いておく、青島のクラブでの出来事できごとであつた。濟南さいなんから青島に引きかへし、いよくあすは内地ないちへ出發といふ前日ぜんじつにクラブでシルヴァー・キングと赤字でマークしてある球一打を求め、その内から四つだけ出し、残り八個をその箱に署名じむいんのまゝ事務員に渡しておいたところ、翌日正午出帆さいごに先立ち最後の一戦に出かけ、預けた箱を受けとると八個の球が七個しかない、一個足らぬといふても此支那このしな事務員